

稲山会 通信

第 46 号

2023 年 1 月 1 日発行

発行人:行方正幸 発行所:稲門山の会代表 TEL: 043-486-0239 MAIL: yukuemnamekata@gmail.com ©稲門山の会1998

巻頭言:山の会と山々が無かりせば…老いて今尚 後藤洋一郎(S49 年卒)

稲門山の会で5年間担当しました現役のコーチ担当を、2022 年末で引き継ぐことにしました。この間、お世話になった OB と卒業された方も含めて山の会会員の皆様に、誌面を借りて深謝申し上げます。お陰様で無事…と書き出せば良かったのですが、私が担当になった時に幹事長だった利藤君が、翌年笛吹川で亡くなる事故が起きました。直前のコーチ会でこの山行計画は出されていませんが、話されていたとしても、数年前東沢釜沢を遡行した時には現場のゴルジュは高巻きし、まして沢筋を滑り下りた経験も全くないので、適切な助言が出来たかは解りません。



只、パーティから事故の一報をいただいたにも関わらず、折立から雲ノ平に向かっていた私の携帯は受信が出来ず、雲ノ平で合流する筈だった(前年も鏡平で高野 OB 遭難の報を受け引き返した)先輩 OB が急遽笛吹川に向かったことを、黒部を囲む山々の下山後に知りました。

全く役に立てず、両パーティに迷惑を掛けてしまいました。事故後、活動の再開要件としてルール作りがされただけでなく、コロナ禍でサークル活動も制限を受けてコーチ会も対面開催出来ないまま会ったこともない現役のメールで申請される山行計画に、極めて慎重にアドバイスをしました。

大丈夫かなと心配した山行程現役の下山連絡に祖父になった気持ちで安堵し、若い感性に溢れた瑞々しい山行報告文を読む度、「山はこんなに楽しいんだなあ」と初心を蘇らせることが出来ました。

私は山の会には2年から入会で、高1夏の鉄山～安達太良山しか登山経験もなく、在学中に参加した合宿(春/谷川国境稜線・夏/北海道中央高地・冬/遠見尾根・春/八ヶ岳縦走・夏/黒部源流への遡行)で、ヘタレメンバーでした。

就職した会社の山岳サークルも転勤で途切れ、5年後に宮之浦岳の春合宿から復帰、下の廊下を堪能した年の大晦日に屏風岩で代表者他二名が死傷事故を起こし解散となりました。暫くの間は、テントを背負い単独縦走したり冬の八ヶ岳に挑んだりしたものの長くは続かず、やがて働き蟻の如く日々の仕事に没頭していきました。この時期に少しでも山に登っていたら……

槍穂の稜線を遠望し山仲間を想う



と今は思います。

そんな折に、同期の岡君が山の会 50 周年記念の催しに声を掛けてくれ参加しました。学生時代とそれに続く若き日に山を十分堪能したのであろう友人達も、山には登らなくなっている様子でした。

2011 年に敗血症で臨死体験をした翌年、仕事は辞めキリギリスの様に遊び暮らそうとやり残し感のあった山登りを再開。山の会より少し前に創立された社会人山岳会に入り、学生時代は諦めた岩登りも 65 歳で学んで、北穂・前穂の初級バリエーションを登り、西穂～奥穂も縦走して老春を謳歌しました。

ハッ峰登攀



熊の岩から北方稜線



一番思い出深いのは、劔岳。長次郎谷雪渓を登り、熊の岩にベーステントを張ってハッ峰を登攀後、北方稜線経由で劔岳山頂に登り、別山尾根を下った山行です。

徳沢で開かれた山の会 60 周年の会に、声を掛けてくれたのも同期の常数君でした。私は燕岳を登り、パノラマコースを経て徳沢に入りました。その地ではお名前位しか存じ上げなかった OB の方々と交流してから北アルプスやトムラウシへの山行にもお誘いいただき、2017 年暮稲山会の役割をお引き受けするに至りました。現役時の自分には想像も出来なかった、山の会との関わりになりました。

思えば、現役時まじめに登ったがヘタレで中途半端な山歴で終わったことが、逆に「途中で諦めるな！ 歩みを止めなければ目標(山頂)に必ず至れる」とその後の人生を過ごすことに繋がった様に思います。山は季節の移ろいだけでなく、地図から地形を、僅かな兆候や天気図から今後の変化を、それを基に(言葉の本来の意味で)自己責任の判断等色々なことを学ばせてくれます。山中では一人でも狭いテントの中での同行者との交流でも、人間性が露になります。その中で、自己内省も含めて人の想いや感情に思い至れることも多い。山は様々な「想像力」を育んでくれました。

現役の皆さん、三役の数年の熱意で会員も増えました。山の会は文字通り同じ釜の飯を食った仲間、加えて同期や近い先輩・後輩は「時代の空気」を共にした仲です。

登山は、基本をしっかり身に付けておけば、幾つになっても仲間とでも一人でも末永く楽しめるよ、と前コーチ担当としてお伝えしておきます。



【特集 I : 海外の山々】



(1)1964 年 初の山の会/OB 会共催エクアドル・アンデス遠征隊の 出発までの泣き・笑い話と初登頂手記

宮野準治 (S35 年卒)

「ミヤノ、それは難しい。まず、無理だな」「どうしてですか？」

「大学に割り当てられた外貨の使途は理事会で決まるが、まず教授の海外研修に割り当てられる。それに余りが出たらスポーツ技術向上の一環で実施する運動部の海外遠征計画に認められる。それには現役の企画であることが求められOBのものは対象外だ。また、山登りはスポーツではないのでまず大学の外貨割り当ては期待しない方がいいヨ」

これは我々が昭和 39 年 (1964 年) にエクアドル・アンデス海外遠征を計画し、母校大浜信泉総長の秘書室長だった大西鐵之助教授 (当時のラグビー界の大御所としても有名) に母校に割り当てられる外貨の一部を使用させてもらいたいと依頼に行った時の大西教授とのやり取り。

ここが大事なところ。当時 (昭和 38 年/1963 年) の日本はまだ資本の自由化が全分野 (以下同じ意味) になされておらず、個人・団体が自由に海外に出かけることはできなかった。そこで反論。

「いや、大西先生、山登りはスポーツですよ。だから山岳部も体育会に属しているのですよね。それにこの企画にはOBだけでなく現役も2名参加します。だからこの企画で習得したものは今後の現役の活動に反映するのは確実です」と食い下がる。

大西先生、「スポーツというには二つ条件があることが必要だ。つまり、スポーツと定義するには勝敗がつくことと観客がいることが求められる。山登りはそのふたつの条件がひとつもない」。

「今言ったように、大学の外貨使用の主たる目的は、教授 (当時は男性だけ) への割り当てにより彼の海外の大学 (院) で習得した知識などがその後の彼の授業内容に反映し内容が充実するとか役立つことに期待できるからだ。一方、スポーツには名目的にも全学生を対象にした計画に割り当てられるものでなくてはならない、と考えられている。例えば野球部が海外遠征するとき、その技術向上が全学生の喜びに貢献するとみなされるものではなくてはならない。全学生を対象にしたものという意味には当然単価が含まれている。早慶戦だけを見てもわかる。応援に来た学生一人頭に野球部に割り当てた外貨がいくらになるか考えてみろ。一人当たり 1 ドルにも満たない。そこに行くと山登りは観客が一人もいない。割り当てた外貨はそのままその山登りに参加した者に割り当て

られるとみなされる。だから外貨に余裕ができたときや特別な理由がある場合にのみ割り当てられる。過去の山岳部の場合もそれに当てはまった。いふなれば例外の場合だけ」。私、無言……。

確かに言われてみればその通り。今も定義はそのまま。だから、最近では“スポーツクライミング”と称して室内にホールド・スタンスを人工的に造った壁をクライミング（速さを競わせる）させ強いてスポーツの範疇に加える操作をしている。

一方、当時日本山岳会主催で海外遠征を出す時の外貨の使い方や各大学・団体が海外遠征計画へ日本山岳会からの外貨割り当てを確実にするために何か工夫をしていなかったかという、いずれも「〇〇学術調査登山遠征隊」なる名称を付け単なる山登りではないことを知らしめていた。そこで我々も気象担当の青木一隆の実施する気象観測の計画を基にして1963年7月「学術調査登山遠征隊」なる冠を付けて当時の日本山岳会の担当理事望月達夫さんに頼みに行く。返事は1964年の外貨は割り当て済み、とのこと。

なお、アルタールのBCとC1で担当の青木が実施したこの気象観測データ（日本山岳会会誌に掲載）は世界の山岳史上初めてのこととして好評を得た。

外貨の手当てがなければ外務省からパスポートがもらえない。エクアドル・アンデスの未踏峰アルタール連峰を攻略するルートはどう見つけるかを考える前にどうしたらエクアドルに行けるか、この大問題をどう解決するか……。とにかく、山の会、OB会共催の最初の海外遠征。何とかしなければという気持ちでいっぱい。

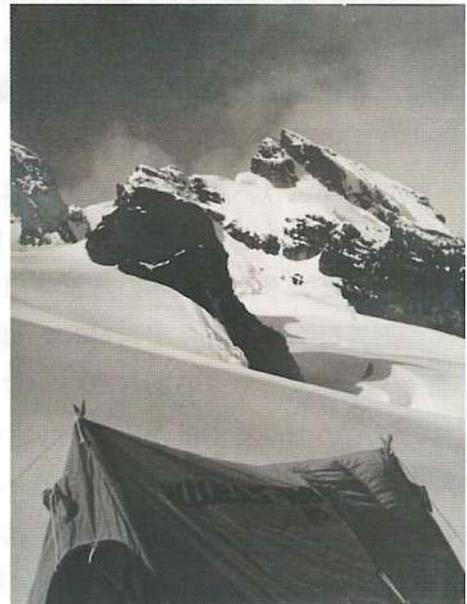
しかし、世の中にはまさに“捨てる神あれば拾う神あり”の格言があるとおり1964年に東京オリンピックが開催される。日本で初めて開催されるオリンピックであるので政府も国民に海外へ目を向けさせる絶好の機会であるということで、資本の完全自由化が1964年4月から実施され、海外渡航者に一人当たりUS\$500が割り当てされることになった。ただ、これを待っていたのでは同年5月にエクアドルに着くことは無理。どうしても1963年の10月中頃までに外貨の手当てのめどがつかなければ、その後の国内準備や船旅期間・現地での登山準備を考えるとアンデスの乾期に間に合わない。

アルタール連峰オビスポ峰(5320m)

そこでマネージャーになった村田進を中心に 故高橋啓二先輩（昭33年卒）がミヤコトラベルという旅行会社に勤めていたので無理を承知で外貨割り当てを前倒しできる方法がないか相談をしに行く。

外貨に関する事項は大蔵省（現在の財務省）の管轄。高橋先輩の知人が大蔵省だったか文部省（現在の文部科学省）だったかとにかく本件に関連する省庁（ただ、大学関係の行事は文部省の管轄）に居るといふので資本の自由化実施前に割り当ての確証だけでも得たいということで先輩のところは何回か出向く。

その熱意が通じたのか、高橋先輩の知人の力かわからないが、文部省から事前割り当ての通知を得たとの返事をもらう。



ここで、メンバーの紹介（年齢は昭和38年現在）。

隊長 宮野準治（昭35年卒27才）、副隊長/登攀隊長 故角田武夫（昭36年卒25才）、マネージャー 村田進（昭37年卒24才 当時大学院生）、登攀副隊長/食料担当 故早川正（昭36年卒25才）、気象担当 故青木一隆（昭38年卒24才）、装備担当 松村啓之亮（昭38年卒24才）、医療担当 小林伸吉（昭39年卒23才 当時大学院生）の若さあふれる7名（俗称「七人の侍：映画のタイトルから。若いOB知っているかな」）。

外務省からパスポートが発行（表紙はなんと革製）され、次の段階はビザ。エクアドルはビザ発行条件に政治犯罪者でないことの証明を求めていた。その「無犯罪証明」をもらうため警視庁に行く。一人ずつ、地下の「取調室」に入り指全部の指紋をとられ指紋台帳と照合されることになる（この時担当官からこれで犯罪を起こしたらすぐ逮捕だと驚かされる）。

エクアドルアンデス遠征七人の侍



その無犯罪証明ができたので、それをもって在日エクアドル大使館にゾロゾロと伺う。受付の女性から「アポを持っている？」と聞かれ、今でこそ「アポ」は日常語となっているが、当時「アホ」は分かっていたが「アポ」の意味は分からない。怪訝な顔をしていると村田マネージャーが「アポイントメント、予約のことだ」と通訳。我々がそれを持っているわけがないので、「どうすればアポをもらえるのか？」と問うと、かの女性は「前もって連絡して大使の都合を聞いて……」という。我々は「それでは……」と言い残して外に出て近くの公衆電話から電話をかけて、「アポイントメントもらいたい。何時ならいいか」と聞くとその女性はガラガラ笑い「ちょっと待って」と言い、間をおいて「大使が今でもいいと言っているからどうぞ」との返事。

ところが、一難去ってまた一難。当時のメンバーは全員独身。大使はビザ発行の条件として誰か一人結婚していなければならない、という。結局、隊長の私が急ぎょ結婚するという事で私のビザは保留され、他のメンバーのビザは発行される。つまり間接的な人質というわけ。冗談に“新婚旅行は行かせてくれ！”と言わせてもらう。

とにかく、エクアドル・アンデスには行ける目途がついたので、まず船の手配。当時航空機使用で海外に行くことは今では考えられないほど高額。ましてや登山などにおいてをや、ということ。それに約1.5トンの荷物がある。それだけでも航空機使用はできない。マネージャーの村田のおやじさんが商社を営んでいたもので、その筋から貨客船が手配できた（片道20日間）。

装備・食料については基本的に野菜など現地調達しなければならないものを除いて、日本から持参。

まず、装備。

テントはBC用（3800mくらいの場所）夏テン8人用4張、前進キャンプの4人用の冬テン（ACの4人用を含む）4張は副会長三田洋二先生のコネで倉敷レーヨン社から8人用15張分の生地を寄付してもらい、細野テント（当時の日本有数のテントや）に上記のテントに必要な生地分を除いた

アルタールのBC



生地をテント製作費の一部に充当してもらうことにして格安の価格で作成してもらおう。ザイル（今はロープという）は11mmのナイロンザイル40m4本、補助ザイル9mm 40m2本、8mmのフィックス用ザイル200m2本を倉庫から寄付してもらおう。

つぎに食料。

食料は寄付をお願いした食品メーカーはどこでも驚くほどの量を寄付してくれた。当時はそれまでに缶詰にされていなかったいろいろな食品の缶詰の試作品や新しくレトルト化が始まった頃でその試作品を、赤道を船で往復しBCまで運んだものを4~5個持ち帰る条件で希望する数量の缶詰やレトルト食品の試作品を寄付してくれた。少々大袈裟に言うところ“いくらでも欲しいだけ持って行け”ということだった。また、“頂上に日の丸を揚げてきてくれ”という励ましをくれたメーカーもあった。ビールなどは丁度市場に缶ビールが出回った時だったので、ビールメーカーから麻袋2コ分の缶ビールが寄付された。食料担当の早川などは“薦かぶりを日本酒メーカーに頼めばよかった”というほどだった。

当時は海外の登山が注目されていたところに東京オリンピックが重なったこともあり我々の計画に賛同してくださった方々は企業が78社、個人は大浜信泉総長をはじめとして88人を数えた（詳しくは会誌「やま12号」）。

そんなこんな事態があったが、昭和39年（1964年）4月29日母校現役の応援部の指揮の下、「都の西北」の大合唱に送られ、東京晴海ふ頭の貨客船プナ号はその錨を揚げた。

サンケイ新聞の記事

当初はアルタール連峰のすべてを登る意気込みだったが、入山期間40数日中乾期にもかかわらず快晴日はわずか3日という天候の悪さ。その悪天候の隙間を狙い6月28日午後3時、角田と早川がアルタール連峰の主峰オビスポ峰の初登頂に成功。その時の角田登攀隊長のサンケイ新聞記載の手記

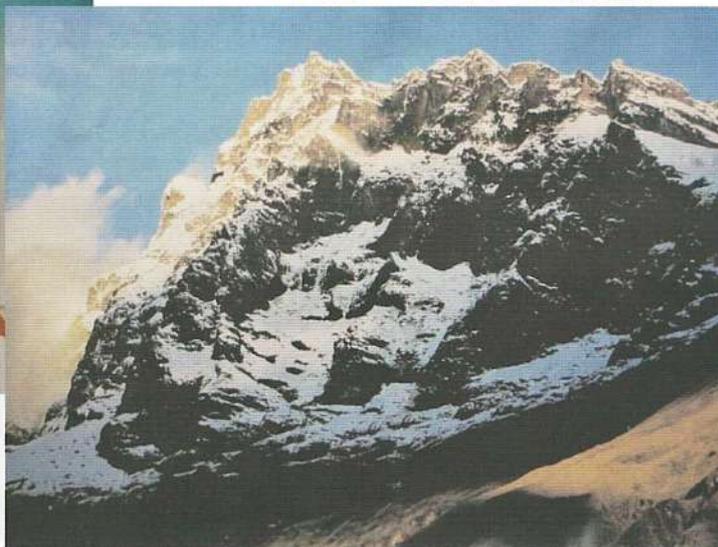
（故山下幸秀（昭和36年卒）が勤務していた関係で産経新聞社が後援してくれた）。



アルタール主峰オビスポ峰(5320m)初登頂



角田武夫副隊長



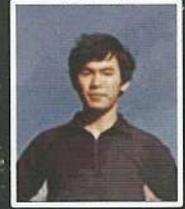
早川 正隊長



(2) ハーフドームの一日



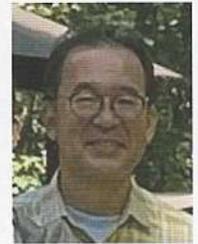
ハーフドーム：鹿間行喜 OB (S52 卒) 撮影



米山不器 (S53 卒)

はじめに

昭和 54 年卒の米山です。現在、私は 67 歳。先日、OB と現役学生が山小屋に一泊して交流する素敵な催しがあり、行方先輩、三宅先輩に誘われて、卒業後 43 年ぶりに現役諸君と顔合わせし、また、なつかしい OB の皆さんと再会してきました。



バーベキューの傍ら私がアメリカの山に登った話をしたら、是非当時の山行文を思い出して書くように行方先輩に頼まれたので、3 年次の夏休みに米国にホームステイした際のヨセミテ・ハイキングの感想を書くことにしました。当時の写真は納屋に見つからなかったもので、仕方ないので、ハイキングのルートのコピペし、当時と現在の私の写真を貼り付けておきます。

1978 年 8 月。僕は英語の勉強のためサンフランシスコ郊外にホームステイをしていた。日本では山の会で、岩登りも教えてもらったので、ヨセミテの大岩壁は憧れの聖地だった。当時、垂直の壁は人工登攀全盛期で、ウォレン・ハーディングがボルトベタ打ちでエルキャピタンの初登攀に成功した時代だった。僕は自然破壊をするのが嫌で、フリークライミングの発祥の地でもあったヨセミテに憧れていた。

そこで授業のない週末にバスでヨセミテにやってきた。相棒は同じ早大生で、僕の週末プランを聞きつけてついてきた男が一人。登頂するのは、スパッと半月形に切れ落ちたヨセミテのシンボル、ハーフドーム (2694m) と決めていた。

ヨセミテ渓谷にあるカリーヴィレッジに宿泊した僕らは、早朝出発し、往復 12 時間の長いトレイルをハーフドーム目指して歩き始めた。途中の公衆便所では、なんと熊が便所から出てきて仰天した。用を足していたのだろうか。

長い間、渓谷にそってトレイルを登っていく。途中巨大な滝をいくつか越えていった。いずれもスケールが大きく、花崗岩の巨大なスラブが延々と続いている。



笛吹川東沢のスケールを 100 倍ほど大きくした感じだ。スラブの表面は磨かれてひんやりと冷たく、リスが走り回っている。

高度をあげてやがて、ハーフドームの肩に辿り着こうとする直前で、先行していたハイカーが立ち止まって地面を指差していた。見ると、なんとガラガラヘビがいた。道の真ん中に。噛まれると非常にやばい。知らずに踏んづけたら大変だ。早朝のトイレにいた熊といい、このガラガラヘビといい、大自然の真ん中にいることを思い知った。人間が彼らの生息域に侵入していただいけかもしれない。

ハーフドームの頂上スラブ



熊や蛇のスリルを味わいながら、最後に待っていたのは、ハーフドームのまさに半月形の岩のドームに相当する最後の数百メートルのスラブの登攀だった。生まれて初めて見る光景だった。

まるでタマネギの皮のように花崗岩のスラブが何枚も頂上に向けて重なっていて、登るには岩に穿孔を開けて打ち込んだ鉄

柱とワイヤーロープにすがりながら、なめらかな岩肌に靴のゴム底を押し当てて、ひたひたとフリクションで登っていくことになる。爽快だ。雨が降ったらきっと大変だろう。

頂上についた。すばっと 1000 メートル垂直に切れ落ちた大岩壁を見下ろした。真下に朝出発したヨセミテ溪谷の谷底やロッジが見える。40 数年後の現在は、すでにこの垂直の大岩壁を、フリーソロ（※ロープをつけずビレイせず、自分の手と足のみで登る単独登攀のこと）で登ったクライマーがいるらしい。その様子を YouTube で見たが、身の毛がよだった。

この 1000 メートルの虚無な空間を岩棚から見下ろした光景を今思い出してもお尻がムズムズする。

ヨセミテから戻り、教室の仲間や先生やホストファミリーに、週末のアドベンチャーとして土産話をした。トイレから出てきた熊の話にみんな大笑いし、ガラガラヘビとの遭遇場面では唾を飲み込んだ。日本では絶対にできない体験だった。思い返すといまでも心がわくわくする。頂上を吹き抜けていた乾いた風を感じる。40 年後の今、もう一度行ってみたい。

以上



ヨセミテ溪谷の朝：鹿間行喜 OB(S52 卒) 撮影

(3) 学生時代の海外の山旅

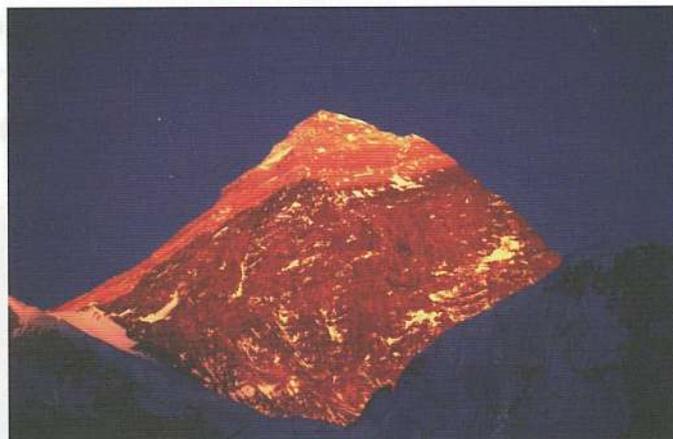
天野智彦 (H4 年卒)

私は学生時代に世界へ目を向けたことで 30 年以上経った今でも海外と関わる仕事をさせて頂いています。植村直己さんの著書「青春を山にかけて」で読んだ海外放浪が憧れでした。4 回の海外渡航をかき摘んでエピソードも交えてお伝えします。

夕日に燃えるエベレスト (8849m)

<①エベレスト街道 1989 年 2 年生>

幸先よくイラク航空機内で、追いコンで追い出したはずの工藤先輩にばったり会い、バンコクの安宿までついて行きました。カトマンズからルクラまでのプロペラ機は強風でなかなか着陸できず、キャンセルを繰り返すうちに同乗者とも仲良くなってしまうタンボチェ (3870m) まで一緒でした。カメラマンの片山夫妻はそこで結婚されて、数年後に四国の仁淀川をカヤックと一緒にツーリングしたこともあります。皆さんからの「長旅ができるのも今のうちだけだよ」というアドバイスを鵜呑みにして、1 年留年を早くも企み始めました。



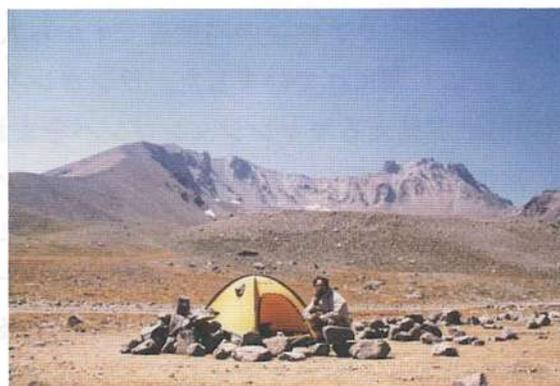
タンボチェから先は富士山より高所、高山病だけでなく食事ができなくなった人から脱落していきました。旅先の食事は楽しみの一つですが、私の場合は「食」への興味が高じて 30 代の 5 年間恵比寿の信州郷土料理屋で料理人をしていましたから人生どうなるか本当に分かりません。カラパタール (5644m) ではタモリさんが喜びそうなイエローベルトの地層が明確なエベレストを撮影することができました。登山はキャンプをベースに写真、スキーやアウトドア等趣味の世界が広がるのがいいですね。

三年生の時は翌年の旅費を稼ぎながら、周遊券を使って北海道・九州の山を周ったり同期の中島さんと「秋休み」を勝手に設定して四国の石鎚山、三嶺、剣山に登りました。以前山の会の現役の学生さんに金曜日をサボって山に行こうと誘ったら何のために大学に来たかわからないと叱られましたが、もっと素晴らしいことがあるのにとうまく伝えられず残念に思います。バイトはデニーズと郵便局の 16 時間勤務がメインで、郵便局はベッド、風呂、食堂が揃っていて簡易宿泊所のような感じでした。

エルジェス山 (3916m) のキャンプ

<②ユーラシア一周 1990 年 4 年生>

東西ドイツ統合とクエート侵攻の年にバックパッカーとして旅立ちました。春の船で横浜港からソ連のナホトカに渡ってシベリア鉄道でモスクワまで行った後、ベルリンから陸路で上海を目指して横浜港に戻るという計画でした。大栈橋で見送ってくれた新入生にとって私がどこ



かへ行ってしまう事はかなりインパクトがあったようです。4人共山の会に残ってくれて今ではいい飲み友達です。小笠原君は私と同じ会社に入り、中国に語学留学させてもらいながらチベットや雲南奥地を旅していた私の分までか、13年も中国駐在をさせられていました。高橋君は卒業後に医師の道を選びました。

夏にかけて東欧・エジプト・ヨルダン・シリアを周った後、トルコのカイセリという街からエルジェス山(3916m)に登る計画をたてましたがルートの間違えてあえなく敗退。採石場のトラックをヒッチハイクして麓の街までなんとか辿り着けました。中パ国境のクンジュラブ峠(4880m)が10月には積雪で通行できなくなってしまうのでノアの箱舟で有名なアララット山(5137m)を横目にイランとパキスタンを鉄道で急ぎ、カラコルムのラカポシ(7788m)が見えるフンザ村まで一気に移動しました。

ウルタル氷河を探索していると風林火山の旗がありびっくり、後に雪崩で亡くなられた長谷川恒男さんのBCでした。峠を無事に通過して中国に入った途端、肉まんや青島ビールが登場して飯が俄然美味しくなりました。カシュガルで出会ったトルコ楽器奏者の藤井良之さんのライブには今でも通っています。シルクロードを回って上海から鑑真号で横浜港に帰国した時には既に初冬でした。前期試験なしの法学部を選んだことが奏功して卒業できるくらいの単位は取れましたが、就職活動をしていなかったので留年にしました。出発前に皆と計画していた春休みのキリマンジャロ山行は湾岸戦争の影響で幻となりました。最近聞いたところでは、小笠原君たちは資金を貯めていなかった私の帰国を戦々恐々としていたとのことでした。

ウルタル氷河の長谷川恒男氏のBC



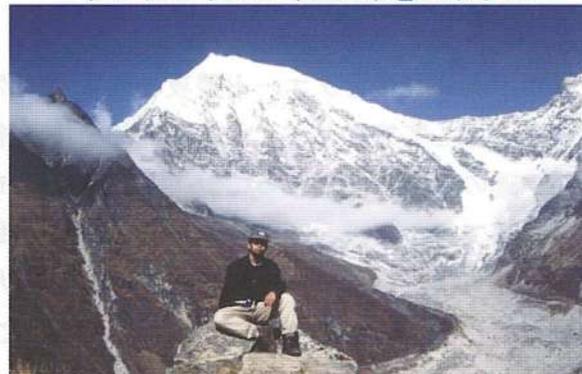
ウルタル I 峰 (7329m)



<③ランタン谷 1991年5年生>

代表的なネパールのトレッキングコースは三つがありますが、当時の「地球の歩き方」にはその一つランタン谷の記載がなかったので再び秋休みを設定して取材旅行兼高所順応に出掛ました。編集部とのやり取りは学生の自分にはとてもいい社会勉強になり、編集部を紹介してくれたのはシベリア鉄道の同乗者ですから人との出会いにも恵まれていました。ランタンリルン(7234m)が見えるキャンジュンゴンパをまわり、高山湖のゴザインクンド(4380m)を経てヘランブーまで下るとカトマンズはすぐでした。10月のネパールはダサインというヒンドゥー的な激しい祭りやティハールという静かな祭りの両方を見ることができます。

ランタンリルン(7234m)をバックに

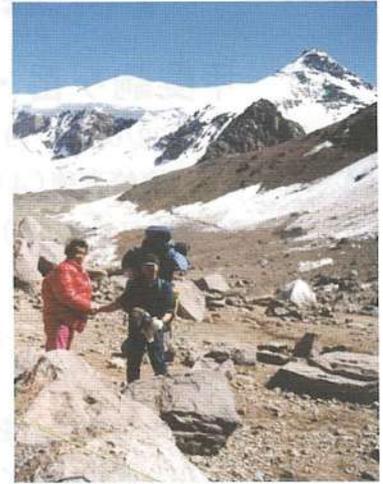


<④アコンカグア(6959m) 1992年卒業旅行>

出発前に冬の白峰三山縦走2回と富士山頂キャンプを遂行して体調は万全でした。ところが大雪で卒業試験が延期になりFIX航空券購入済みだった私は万事休す、出発して二留か中止して卒業の選択を突然迫られたのです。HISに同行したインドに行く予定の高橋君にとって私の交渉は他人事、隣でニタニタしていました。やはり出発の変更はできませんでしたが、帰りを3月中旬追試期間中到着の便に変更ができました。大学職員に事情を説明したらなんと、私の帰国に合わせて私の受験科目を追試日程後半にしてくれたのです。卒業できなかつたら全く別の人生を歩んでいたはずなので、この職員の方には感謝してもしきれません。すぐに無理だと諦めないことですね。

ブエノスアイレスから夜行列車アコンカグア号に乗り、メンドーサで手続きをして、プエンテデルインカでロバを雇い荷揚げを開始しました。コンフレンシアで一泊、翌日も河原をひたすら歩き続け、すれ違う下山者と話をすると天候が悪く登頂はできなかったようで不安になりました。BC(4300m)への最後の登りは急登で既にバテバテ。テントを設営していると驚くべきことにエベレスト街道で一緒だった穂高岳山荘の松見さんがいるのではないですか。地球の裏側でこんなに心強いことがあるのでしょうか？ C1までの往復を繰り返し高所順応もうまくいきました。BCまでの苦行を忘れスキーを持ってくれば良かったと思ったほどです。C2は既に6000m、高度感や強風で死の恐怖を感じました。突風で張り綱は役に立たないのでテントの中に石を置いて寝ました。アタックの日に幸い風は収まりましたが、頂上までの標高差約1000mのピストンは酸欠、疲れ、寒さとの戦いでした。頂上から見渡すアンデス山脈の眺めは今でも目に焼き付いていて、事あるごとに自分を励ましてくれます。

アコンカグアのBCにて



アコンカグア(6959m)登頂



頂上からのアンデスの山々



長旅をするとその余韻から一生抜け出せなくなってしまうと思いますが、旅人気分は今でも抜けません。現在はアジア・アフリカを中心に医療機器の海外営業とJICAの海外医療機器研修の講師をしています。旅先でお世話になった方への恩返しのつもりで研修生に講義をすることが今ではライフワークとなりました。これまで60カ国以上を回りましたので研修生の母国での写真を見せながら思い出話をすると皆さんとても喜んでくれて仲良しになれます。研修生巡りの旅が夢です。アルゼンチンなんて遠いから二度と行くことはないと思っていましたが、2012年に麻酔学会があり再訪できました。二度あることが三度あることを願います。以上

JICAの研修生たちと



【特集Ⅱ：2022年夏の記録】

(1) 甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳山行

海崎真穂 (WMS 4年)

- ① 日程：2022/6/18～19
 ② メンバー：海崎真穂(4年)、横倉巧味(院1年)、小田直輝(4年)
 ③ 概要：●1日目(6/18) 甲斐駒ヶ岳

7:13 行動開始 双子山(8:50)・駒津峰(9:40)・甲斐駒ヶ岳山頂(11:00)・仙水
 (14:20)14:55 長衛小屋 行動時間(休憩含む) 7:40 平均ペース 70-90%

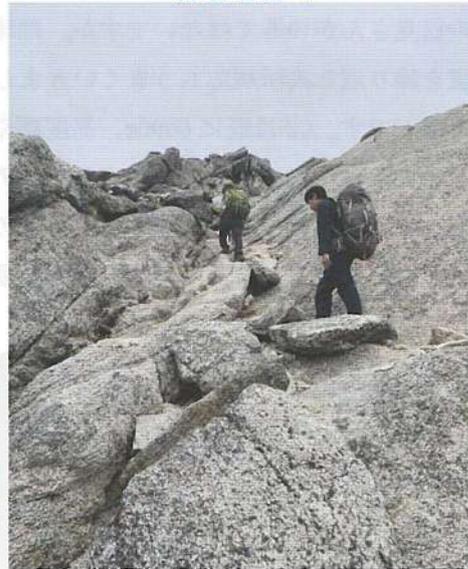
双子山で小田からテントを託され、駒津峰の直前の急登で疲れていた海崎、まだ6合目かと思いつつ、植生が高山っぽくなってきてテンションが上がる。直登と巻き道とで岩場歩きをしたかったために直登で満場一致。

岩場に入ってすぐのところは中々に岩遊びをしている感が満載で楽しかった。ジムの技術が必要になる難易度の場所なんて行くことはないが、体の使い方が似ているものだな、と実感。

駒津峰



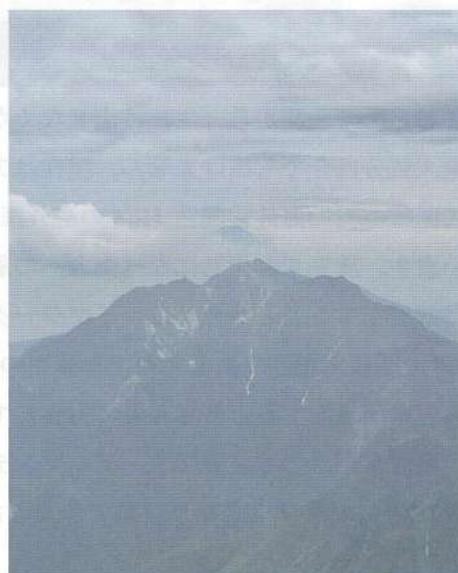
岩場に行く



甲斐駒ヶ岳山頂



鳳凰三山の奥に富士山



頂上にて。曇り。前頁の右の写真だと見にくいが富士山とオベリスクが見えたので満足。計画書では栗沢山へ行く予定であったが、疲れていたためテン場へ向かう。

● 2日目(6/19) 仙丈ヶ岳

5:00 行動開始 分岐(6:30:小田横倉水分不足になることを懸念して下山)・小仙丈ヶ岳(7:05)・仙丈ヶ岳(7:55)・小仙丈ヶ岳(8:33) 9:45 長衛小屋行動時間(休憩含む)
4:45 平均ペース 150~170%

遥かに仙丈ヶ岳

6:30まで3人で行動。途中横倉が水のペットボトルを落としてしまい、小田と供に下山することにする。周りに登山客がたくさんいたこと、体力に余裕があったこと等をふまえ海崎は単独で仙丈ヶ岳を目指す。

小仙丈ヶ岳。天気が良くて気分爽快。後から父に聞いたら時期外れの好天は危険らしい。実際、下界に降りてから雨が降っていたのでなるほど危険だと感じた。

雪渓を発見。雪山で培ったフリクション、ステップキッキングが役にたって良かった。

仙丈ヶ岳にて。コースタイムの1.5倍以上のスピードで進めたのは荷物がこれだったからである。(前日のテントに比べ無いようなもの) 水と食糧とエマージェンシーは持っていたので許されるだろう。2人を待たせているのでさっさと下山することにする。下山途中雷鳥を発見。いいことあるかな。

残雪があった



下山時に雷鳥発見



●所感 海崎真穂(4年)

1日目の甲斐駒ヶ岳は、テントを持っていたとはいえ自身の体力の無さを痛感した。久々のテント泊ではあったが、荷物が重かろうともう少し動けるものだと思っていた。慣れてしまえば寧ろ荷物が無いことにふわふわした感覚を持ったが、慣れるまでの時間がしんどかった。

荷物が重くなることによってシンプルに疲れるだけでなく、ふらつきやすくなってしまいうため慣れるためにも歩荷練習をするなど経験を積まないといけないと感じた。

2日目の仙丈ヶ岳についてはタイムアタック気分だった。天気もよかったため、さっさと進む。特にこれといった難所があるわけではなかったので新入生などからしても来やすいのではないかと考えながら、単独行動はあまり望ましくないだろうなと思いつつ、仙丈ヶ岳の空気を楽しむ。あんな荷物で行ったもんだから周りの人には不審がられたかもしれないが抜かすことはあったものの抜かされることはなかったので良しとする。

途中、駒津峰で休んでいた時に隣にいたおっちゃんに登山靴が傷んできていることを指摘されたのでもうそろそろ変え時かもしれない。思い入れもあるし靴擦れしないしお気に入りだけでも今度一回カモシカにでも行ってこようか。

●横倉巧味(院1年)

初のテント泊ということで心の余裕があまりなかったが、前回来たときには使わなかった直登ルートで甲斐駒に登頂できたので達成感があった。登りは景色を見る余裕があり、南アルプスの眺めに元気をもらいながら歩くことができたが、ザレ場・ガレ場の下りで体力を消耗したため、仙水峠に降りた時点で栗沢山まで登る体力は残っていなかった。

翌日は仙丈ヶ岳に登る予定だったが、準備不足と集中力不足により途中で水を落としてしまったため、登頂はできなかった。もう少し簡単な山でテント泊に慣れてから来ても良かったかもしれないとは思ったが、これからも登山を続けていこうと思える山行だった。次回は鳳凰三山や黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳に登ってみたい。

●小田直輝(4年)

4ヶ月ぶりの登山ということもあり久しぶりに登山ができるといったワクワク感、体力が落ちているのではないかとといった不安感を持ち、今回の登山に挑んだ。結果は案の定、不安が的中し、体力が落ち運動不足を痛感した登山になってしまった。海崎に「俺がテント持ってやるよ！」と豪語したのにも関わらず、双児山あたりで、「海崎、テント変わってくれー！」と情けない始末だった。途中、免許証の入った財布を山で無くすなどハプニング続きの山行であった。久しぶりの登山なのにも関わらず、たかを括ってしまっていたのかもしれない。次は日々のトレーニングを怠らず、真剣に登山に向き合いたいと思う。

P.S. 財布は安城こもれば山岳会の方達が見つけてくださった。後日、お礼をこもれば会アドレス向けにメールで送信したところ、財布を拾ってくださった70歳の元気な女性の方から夜中23時にお電話を頂いた。見つかって良かったねと何度も言っていて本当にありがたいなと思い何度も感謝の気持ちを伝えさせていただいた。そのあとは何故か1時間ほど電話越しに過去の登山の話聞かせていただいた。(あ、はい、とても楽しい時間でした…笑)

海崎、仙丈ヶ岳登頂





(2) 瑞牆山・金峰山夏合宿報告書

高橋花奈 (WMS 3年)

① 日程：2022/8/02～03

② メンバー：

L 高橋花奈(3年)、SL 櫛舎裕太(3年)、新井健二郎(3年)
小野秀太郎(3年)、手塚拓夢(2年)、藤原隆仁(2年)、
木村亮英(2年)、山口和起(2年)、小原茉穂(1年)、
深山英郎(1年)、岡田来実(1年)

③ 概要

お世話になっております。山の会の高橋です。

天気も良く、今日明日の山行は予定通り行うつもりです。

計画について変更はありませんが、体調不良やコロナ濃厚接触者等の理由で、人数は11人となっています。

山の会の高橋花奈です。先程瑞牆山(2230m)から下山しました。先程、無事に下山しました。山頂でも大変暑かったですが、熱中症などもなく全員無事にテント場に到着しました。明日の金峰山も気をつけて登りたいと思います！



瑞牆山山頂の集合写真



富士見平のテント場



お世話になっております。山の会副幹事長の高橋花奈です。金峰山(2599m)の山行を開始しますので、取り急ぎ連絡いたします。熱中症や怪我に注意して登ろうと思います。

昨日の夜の時点で、膝の痛みがあり金峰山の登山は無理そうだと、という1年生の初心者のメンバーがいたため、経験者メンバー1人が付き添い、今朝ひと足先に帰宅しました。朝のメールで伝え忘れており申し訳ありません。午前中にはその2人からも無事帰宅したとの連絡を受けました。そのメンバーは以前から膝の痛みがあり、今回参加してみたものの、2日間の山登りは無理そうだと判断したそうです。

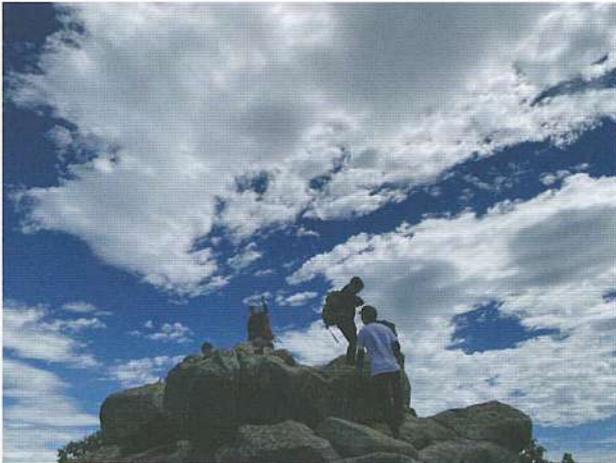
また、今日の登山では、途中で足をつってしまったメンバーがいたものの、幸いそれほど酷くなく、自力で無事に下山できました。

どちらのトラブルも、櫛舎くんはじめ経験者メンバーに色々と頼ってしまいましたが、全員無事に下山でき安心しました。

また五丈岩ですが、数人が積極的に登り、楽しんでいました。岩が多い金峰山の登山が、メンバーにとって新鮮でいい経験になっていれば嬉しいです。

（平と2599）金峰山

書古碑部合夏山登山部 山頂にて(集合写真)



● 所感 CL 高橋花奈 今回の合宿で特に良かった点は、多くのメンバーにとって新鮮な体験ができたことだ。まず 2500m 級の山に登るのが初めてだという人が多く、金峰山・瑞牆山の登頂で達成感を味わってもらえたと思う。幸いにも2日間ともに山行中の天気良く、山頂からの景色も圧巻だった。また、特に岩場・鎖場が多い金峰山では、登りが楽しいと言っていた人も多々いた。そして、今回が初めてのテント泊だという人がメンバーの大多数を占めた。テントの中で、寝袋を使って寝るいい経験ができたと思う。個人で山登りを始める場合、テント泊はなかなかハードルが高いと思われるが、サークルのメンバーと共にテント泊に挑戦することで、個人で山登りする場合などもテント泊が選択肢に入りやすいのではないかと思います。これを機に、1泊や2泊の山登りにも積極的に挑戦してほしい。反省点としては、メンバーの体調管理が挙げられる。1日目の夜の時点で、膝の痛みにより金峰山の登山に懸念を持つ1年生の初心者のメンバーがいたため、経験者メンバー1人が付き添い、次の日にひと足先に下山した。そのメンバーは以前から膝の痛みがあり、より詳しく話を聞いておくべきだったように思う。また、金峰山の登山では、途中で足をつってしまったメンバーがいた。幸いそれほど酷くなく、自力で無事に下山できたものの、無理をして歩いてないか、ペースは順当か、細かな注意が足りなかったと反省させられた。どちらのトラブルも、SLの櫛舎くんはじめ経験者メンバー

に色々頼ってしまったり、他のメンバーにも協力してもらったりと、いくつもの場面で全員に助けもらった。参加者が全員安全に下山し、合宿を無事に終わられたことは様々な人の協力のおかげであり、この場を借りて感謝の意を表したい。また、今回はコロナの対策にも特に気をつけた合宿だった。事前に対策案を話し合い、参加者には合宿前から体温を測ってもらい、山行中も無事に合宿が終わられるよう一層気を配った。コロナ禍のなかで無事に合宿を決行できたのはありがたいことだと思う。ただ、合宿前の時点でコロナの影響で参加できないメンバーも複数いたため、元々合宿を希望していた全員では行えなかったことが心残りである。また時期をずらして金峰山に登れればと思う。

● SL 櫛舎祐太 今回は天気にも恵まれた。結局ザックカバーを出したりレインを着るほどの雨は降らなかった。ちょうど新型コロナの感染者が爆増している最中で、パーティーメンバーでも自身が感染したり、直前に会った友人が感染したりしたため参加を取りやめる人がいた。残念だがこればかりはどうしようもなかった。幸い下山後の感染報告は一件も受け取らなかった。また、今回は泊登山が初めてという人もおり、テント、マット、シュラフの寝心地は人それぞれだった。今後沢山泊まってどんどん慣れてくれると嬉しい。今回起きたトラブルはひざの痛みによる撤退と途中での脚攣りだった。前者については一日目夜に本人から申し出があり、一人に付き添ってもらった。前述の事情でB3経験者が二人だったため、トラブル対処の自由度を鑑みてせつかくの天気の良い金峰であったが付き添いをお願いした。今後大弛峠からの金峰山行でも開催しようか。メンバー離脱の経験はこれまでの山行ではなかったが、手前まで来たのに申し訳ないが、付き添いを出したことは正しい判断だったと考える。もう一つの脚攣りについては、金峰の稜線で起こった。話を聞くと、疲労から昨晚及び朝はあまり食べておらず、ミネラルの摂取状況もあまりよくなかった。これに関しては、周りに目を配り切れていなかったと反省している。今までの山行ではこの人数はあったがこの期間はなかった。日帰り山行なら適当でいいということは全くないが、長期になればなるほど周りをきちんと見ることが大切であると学んだ。何はともあれ、大きな問題もなく無事に山行を終了でき、おまけに瑞牆の山頂の景色にリベンジを果たせてよかった。

● 小野秀太郎(B3) 初の泊まりの登山ということで期待半分不安半分であったが、天気にも恵まれ、加えて様々な方の支えがあったおかげで無事に下山することができた。今回はテントは部室からシュラフとマットは持参という形で泊まったが、テントが予想以上に広くとても快適に過ごすことができた。質の高い睡眠を過ごせたおかげで2日目の金峰山も非常に良いペースで登山することができた。支援をしてくださっているOB/OGの方々には感謝しかありません。全体的な反省点はリーダー達が細やかに挙げているため割愛するが、個人的な反省点としては、体力不足があった。共同装備でテントを担いだ際、予想以上の重さで驚いたと同時に己の体力の足りなさを実感した。今回は富士見平小屋にテントを張り unnecessaryな荷物を置いて山に登ることができたが、登山においてこのような環境があるわけではない。今後は、より重い荷物を担いで平然と登れるように日々トレーニングを行うこととする。

● OB会の皆様へのご報告と感謝 今回の合宿に際して、部室装備の経年劣化と不足から6~7人用テントを購入させていただきました。購入に際しては、半分をOB/OG会からの支援、半分を大学の課外活動補助金で賄うべく着実に書類手続を進めております。物品購入の相談に乗っていただいたコーチ会の行方様、常数様、後藤様、村田様、鹿間様をはじめ、ご支援くださいました稲門山の会のOB・OGの皆様に、現役一同より心から感謝申し上げます。大切に活用させていただきます。

(3) 巻機山米子沢遡行記

齋藤壮呉 (WMS 院 1 年)

- ① 日 程 : 2022/9/11
- ② メンバー : 齋藤壮呉 (院 1 年)、小田直輝 (4 年)、木村亮英 (2 年)
- ③ 行動記録 6:00 駐車場 - 6:15 入渓 - 6:56 3 段 40m - 8:10 すだれ状 17m - 8:20
ゴルジュ 入口 - 9:10 大ナメ - 11:00 避難小屋 - 11:30 巻機山 - 14:20 駐車場
- ④ 概 要 :

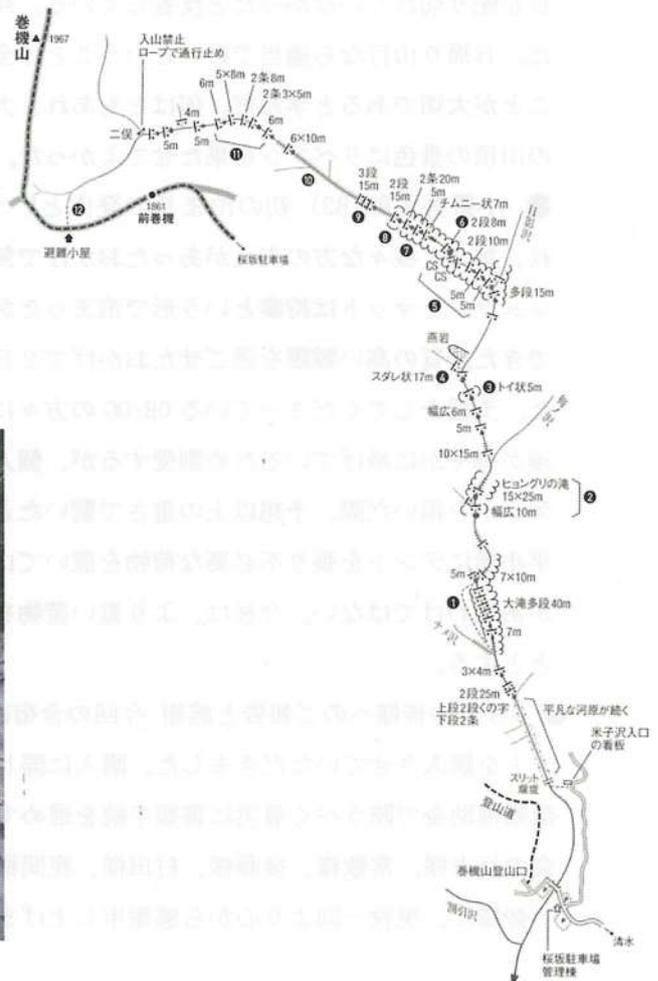
昨年度から米子沢遡行を計画していた。米子沢はⅠ級上からⅡ級に分類されている。特有の滑滝や入渓者の多さから事故が多いと有名である。計画段階で遡行図を見ていると、滝がいちいちでかいことに少しひるんだ。また、入渓者が多いことから、登攀中に後ろで待たれるのも嫌だなあと考えていた。遡行時間が通常 5 時間以上と、長いことも気がかりだった。心配が多い。前日 9 時に所沢に集合、レンタカーを借りて南魚沼へ出発する。今回の車はキーが効かず、毎回物理鍵での開閉だった。車内ではずっと男 3 人夜のテンションでくだらない下世話。途中、夕飯をはさみ、翌 1 時に駐車場に到着。すでに多くの車があった。月が煌々としており、月明かりで自分の影ができていた。寝る前に木村君がじーっと地図を見ていた、えらい。自分は夕方コーヒーを飲んだせいか、いまいち眠れずに 3 時過ぎまでぼーとしていた。

5 時に起床、車がどんどん入ってきていた。

団体での沢登りとおぼしき人々が多くみられたが、百名山というだけあって、一般登山客も多かった。装備を整え 6 時に出発。天気は快晴、入口の堤防につくと休日の上野公園くらい人がいた。まじかあとと思ったが、結果的には人の多さに困ることはなかった。多くの滝が左右どちらからでも登れ、一方に先客がとりついている場合には逆から登れた。



米子沢遡行図



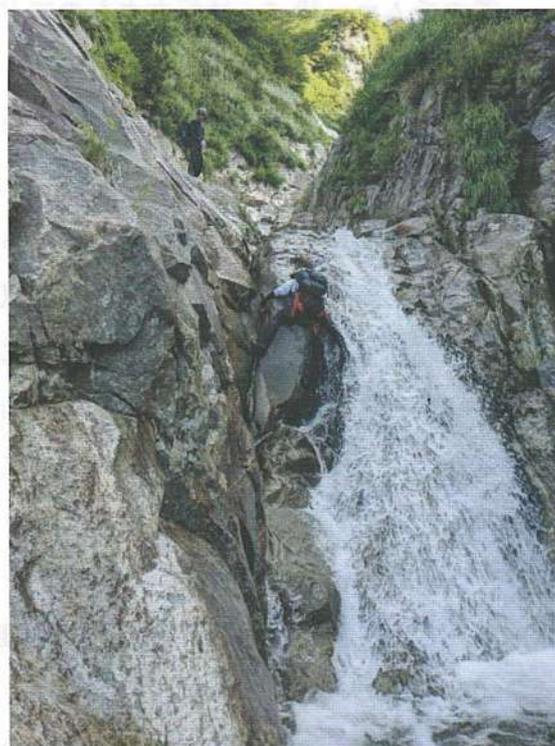
序盤の単調なゴロで団体を3組ほど抜かした。登攀や巻きでうしろに付かれるのも嫌だったが、運よくそうはならなかった。想定していたよりもぬめりは無い印象だったが慎重に進む。順調に3段40mに到着、少し休憩して改めて装備を確かめてから巻き道に入る。ピンクテープもあり、明瞭な巻き道だったが、どこもどろどろで少し気をつかった。山頂のあたりでも湿地のようになっていたが、水を含みやすい土質なのかな？と思う。

遡行図②の幅広10mは団体が左からとりついているということもあって、行方さんのアドバイス通り水流右から登った。乗り上げる部分が少し悪く、この滝はロープを出した。一本残置ピトンが打ってあった。結果的にロープを出したのはここだけだった。二人も難なく超えてきた。

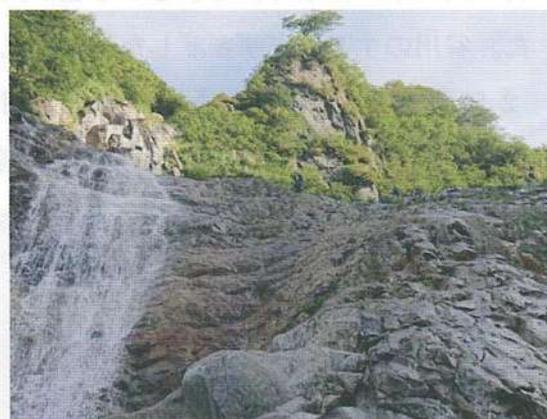
遡行図③のトイ状5mは水流左からとりつき、冷たい水を浴びながら越える。続いて小田がとりつくが、水流の足を探せず、水の冷たさに一度退く。レインを着て再度トライ。僕は何度も“水流に！足が！あるから！”と叫んで声が枯れた。木村は水流の足が見つからなかった様で、お助け紐で引き上げた。すだれ状17mは日が差して美しかった。

遡行5時間と気を張っていたが、あっという間にゴルジュ入口。たしかこのあたりで小田がたいしたことのないトラバースを、あえて？難しいところからとりついて落ちてどっぷり水に浸かっていた。一方、同じ場所で木村は自分から水に入るとりついていた。みんな、寒くないのか……？2段10mは階段状で難しくない。水流左からとりつき、右にトラバースして越える。次のCSは右岸を巻く。

⑥の2段8mは右岸に先客があったので、左岸から。とりついてみるとここも階段。遡行図にあった通り少し脆かった。いつも通り慎重に確かめながら越えた。二人にも一応お助け紐はだしておいたが、必要なかった模様。



③トイ状5m しがみつ小田と、“水流に！足が！”と叫ぶ齋藤



すだれ状17m



ゴルジュ2段10m 左に小田、目線の先に木村が登っている

⑦のチムニー状 7m は行方さんのアドバイス通り手足を突っ張って登る。最後だけ少しいやらしかったが、軽いスリルを楽しんだ。その後、大ナメに到達。日が当たり、ゴルジュ帯に比べあたたかかった。滑らないようにコースをとりながらのんびり歩く。

⑩のシャワークライムでいままで守ってきたザックがびしょびしょに。二俣のあたりから野イチゴがいっぱい実っていた。なにか懐かしい気分の一つだけ頂いておいた。ツメもなく避難小屋に到着。

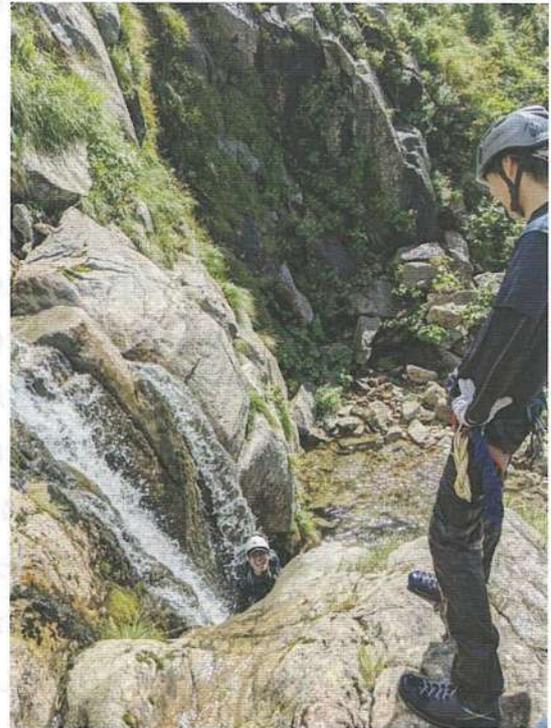
久しぶりの快晴とあって、多くの登山者があった。木道をたどって山頂についたが、どうにも釈然としない。というものの、となりの山のほうが高い。行ってみるとそこにはケルンがあるばかりだが、山頂にいたじいさんいわくやはり実際の巻機山の山頂(1967m)はここのこと。

景色が美しかった。2000m に満たない標高だが、背の高い木々はなく、さまざまな色が山を覆っていた。谷川のすこしギザギザした稜線が見えた。

2 時間で下り、いつも通り(妙義山、四阿山のおおなじく)上里 SA でラーメンを食べて帰京した。



⑦チムニー状 7m 登攀は齋藤、奥に木村 いい遠近感。



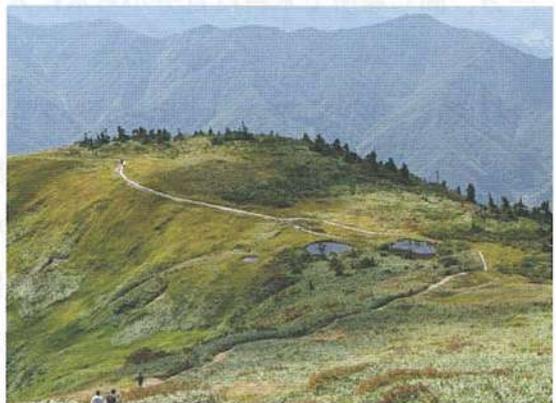
シャワークライムの小田、手前は齋藤



巻機山頂周辺 木村撮影、彼はなんだかいい写真をとる。



山頂にて 左から木村・小田・齋藤



巻機山頂上

(4) 上高地ーババ平撤退報告

笠原 豊 (S40 卒)

百高山未了2山を狙って入山しましたが、装備の忘れ・劣化にザック背負い傷発生などが重なり槍沢ババ平から撤退しました。失敗事例としてご参考に記します。

① 行程実績：2022/8/4～8/6

8/4 上高地→槍沢ババ平幕営、8/5→横尾幕営、8/6→上高地→帰宅。

② メンバー：笠原豊（昭40年卒）、次男夫妻の計3名

③ 計画背景

ネット上に「百高山、赤沢山、南真砂岳」の記載があった。一方、私は山と溪谷誌付録「山の便利帳」の「日本の山岳標高ベスト～100」を登ったのだが気がなった。ネット記事は『日本の山岳標高一覧』（国土地理院1991年）により、赤沢山2670mと南真砂岳2713mがあるとされたので、この2山は未了であると認識した。

2019年に荒天撤退した西鎌尾根の再挑戦を考えていたので、この2山を加えて計画した。

80歳の単独を心配されたが、次男夫妻が同行してくれることで実現した。

④ 登山計画（提出済要旨）

コロナ禍にて山小屋・テント場の定員削減や予約制で不自由となり、重要泊地水晶小屋の予約ができず、前後の三俣山荘から湯俣までの長距離は間質性肺炎の私には無理となったが、途中露営を想定に含め、計画書記述は「8/4 上高地→ババ平 8/5→西岳→赤沢山往復（藪漕ぎ）→西岳幕営 8/6→槍ヶ岳幕営 8/7→西鎌尾根→三俣山荘幕営 8/8→南真砂岳→湯俣幕営 8/9→高瀬ダム→大町→帰宅、予備日2日、食料8日分」とした。

⑤ 山行状況 ● 8/4（木）終日雨～雷雨：

上高地へ夜行バスで着くと本降りの雨で、時々雷雨を含め夜半まで続いた。ザックの大きさを40Lに先に決めて軽量化に努めたが、食料8日分などの嵩張りが収まらず、3.5Lのサイドポケットを左右に付加し、2.7Lポーチとヘルメットを外付けし、胸部に4.5L防水バッグを掛けていたので荷物の形が凸々になり、雨具の他にポンチョを被って行動した。次男もメインザックに収まらず胸前に35Lのサブザックを抱えポンチョを被った。

上高地出発時（富士登山の金剛杖）



明神館



氷壁の宿徳澤園売店（10月に再来する旨挨拶）



横尾山荘前



横尾まではほぼ計画通り進捗したが、ショルダーベルトに着けた水筒ポシエット（500ml）を高い位置に移動させたら腕振りに干渉しなくなったものの、背負いバランスの悪さが鎖骨周辺の皮膚に当たりだし、背負いベルトが食い込んできた。槍沢ロッジでは雷雨で肌着が濡れ始めていた。勾配が増すにつれ呼吸が追いつかなくなり、口呼吸で喉が渇きペースが落ちて来たので次男たちを先に行かせた。

ババ平に着くと、次男たちはテント設営に手間取っていた。装備の殆どを私から貸した使い古しであり、ドーム型テントのフレームショックコードが伸びきっていた。予備があったが、エンドチップを外せず、伸びたコードを押込むのに手間取った。テントはシームテープ剥離と雨漏りを起こしていた。

私も並行してツエルト張りにかかったが、EVA フォームマットを忘れたことに気付いた。出発時にザックへあれこれ（サンダル含め）外付けするとき忘れたのだ。マットなしでは地面の凹凸を直接受けるので平坦地を探したが水はけの悪い冠水状態しか見つからず、日暮れに追われツエルトを広げた。雷雨中で、床の底割れからも浸水した。荷物の上にグランドシートを広げ、結露など滴下する中でタオルで拭き取りながら濡れた肌着を着替え漸くホッとした。寒さ震えが迫っていた。濡れた衣類は絞って重ね着した。ドームテントへ行き、3人の食器にオートミールを量り取りピーナツを加え、湯を沸かして加え、ケチャップとマヨネで味付けして夕食とした。エアーマットが空気漏れで使えず、自己膨張マットを2人で使わせ、炊事用ベニヤ板で少し補うことにした。

私はツエルトに戻り寝支度をした。ゴアズボンを脱ぐとシームテープが剥がれてきた。綿無しレスキュークロススの寝袋に入ったが濡れが広がり、保温効果は？ だった。結露滴下があるので雨具を被せ、地面へ体温が吸われないよう横向きに臥せ、雷鳴を聞きながら明日の行動について考えた。

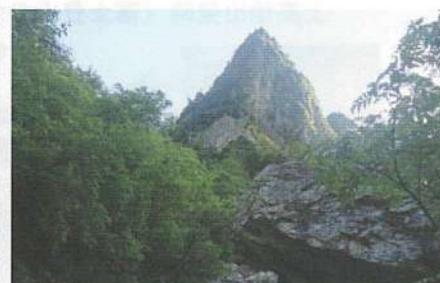
● 8/5（金）朝小雨、曇り時々晴れ～一時日射、夕方急雨：

未明に赤沢山だけでもと、考えたが、【撤退】とした。理由：ショルダー擦れ、マット忘れ、雨漏りなどで、雨がやみ撤収すると荷は重くなっていた。赤沢山の岩壁が望め、かつて行方さんが登攀した壁はどの辺りだろうかと削りだされた急崖を高く見上げた。数万年前まで氷河からU字谷の側壁になったのだろうと想った。晴れたのはいつきで霧が無い、雨支度のまま下山にかかった。

ババ平、雨止む。槍沢上部に朝日

赤沢山方面スカイライン

赤沢山の槍見



赤沢山から巨大な岩塊が剥落し岩小屋などを形成し、かつてのU字谷側壁の浸食として観察した。槍沢ロッジへ着くと携帯電話が通じたのでヒュッテ西岳と湯俣温泉晴嵐荘へテント場予約のキャンセルを連絡した。10時頃横尾へ着き設営し、濡れものを天日に広げた。

木陰の草地に車座となり、カニヤの乾パンにツナマヨを乗せて昼食とした。その後横になってくつろいだ。夕方急雨ありドームテント内で湯を沸かし、 α 米、ハンバーグ、カレー、トマトポタージュの夕食とした。夜は温かく眠れた。

横尾から屏風岩



横尾キャンプ場にて、ドームテントとツェルト



● 8/6 (土) 曇り時々晴れ、一時日射

横尾の朝は小降りの中で撤収した。徳澤では10月に徳澤園へ再来する予定を思い写真に収めた。奥又白上部の岩壁は雲に覆われ観ることが出来なかった。

徳澤園前



10月に目指す徳本峠への分岐を確認した。

梓川と奥又白方面



梓川上流方面



背景：明神岳東稜～ひょうたん池のコル



明神では、次男夫妻に明神池まで往復させたが小銭を置いていったため入場できず、すぐ戻ってきた。ザックの重量を測ると16.4kgだったが外付けポーチと胸前バッグを加えると総重量19kg弱あった。明神から行き交う人々は殆どがマスクを着けていた。COVID-19感染防止の山だった。小梨平のキャンプ場で入浴できてさっぱりした。

河童橋からの穂高岳は岳沢ヒュッテ辺りから上が雲だった。

河童橋前の三人



河童橋と穂高岳方面



上高地バス停に着くと運行遅れを生じていた。高速道路で事故あり、一時通行止めや渋滞あり、バスの配車が滞っていた。15:00 発新宿行きは25分遅れて出発し、BT新宿着は定刻35分遅れた。

(5) 尾瀬夏合宿報告書

羽山航平 (WMS 2年)

① 日程：2022/9/14～9/16

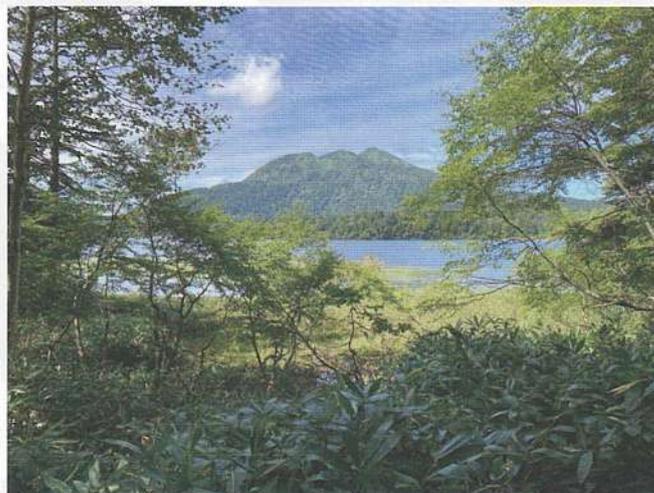
② メンバー：CL:羽山航平(2年)、SL:木村亮英(2年) 藤原隆仁(2年)、飯田隼介(1年)、谷口至郎(1年)、井上陽太(1年)

③ 概要：

今回の合宿は、北岳が直前にバスが止まっているという報告があった(復旧済み)ことと、リーダーがコロナ陽性者の接触者になってしまったこともあり、行先を尾瀬に変更した。私は残雪期に1泊2日で燧ヶ岳を、1ヶ月前には至仏山を登っていた。今回が初めての2泊3日だったが、尾瀬ならエスケープがあり、荷物をデポして登れるため、北岳より簡単で安全に、かつ楽しく登れると考え、尾瀬に変更した。結果、二年羽山、木村、藤原、一年飯田、谷口、井上の6人での小規模な登山にはなったものの、よい山行となった。

● 9/14 11:15 三平橋(一ノ瀬)から行動開始。日が出ており、標高1500mとは思えない暑さだった。急登に息を切らして三平峠までの急登を登った。

(左)尾瀬の入口、三平峠 (右)三平峠から尾瀬沼に下りる途中、燧ヶ岳が林の切れ間から見え、感動。



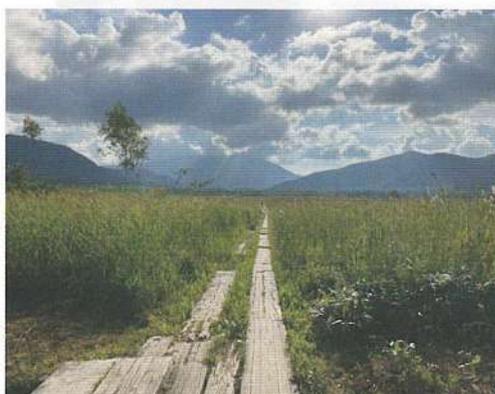
12:30 尾瀬沼ビジターセンターの近くで、昼食を取る。この景色を見ながら食べるご飯は最高だった。

14:30 沼尻休憩所付近。尾瀬沼の湿原はここ以降無く、尾瀬ヶ原まで少し単調な林道が続く。

15:40 見晴キャンプ場到着。草紅葉が始まりかけており、美しい。

(左)尾瀬ヶ原

(右)テントの設営



全員テント泊経験者だったため、スムーズだった。しかし、フライの張り縄の必要性を理解しておらず、正しいテントの張り方が出来ていなかった。

17:30 夕食を全員で作った。お湯は共同装備で協力して沸かした。SOTO のバーナーは白煙を出す謎の不調に見舞われたが、ライターで火を付けると正常に稼働し、直った。おそらく湿度と気圧によるものと思われる。日が落ちるのが思っていたより早く、ヘッドライトを付けて夕食を食べた。

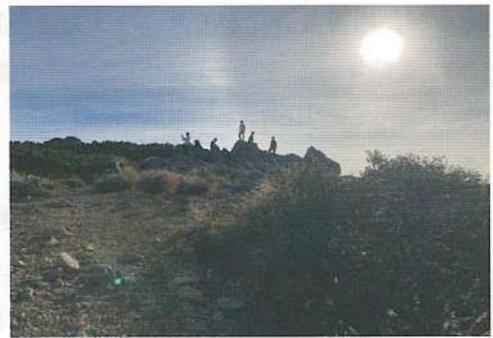
19:00 尾瀬ヶ原プチナイトウォークをして、星空を見た。多少雲は出ていたものの、綺麗な星空だった。天の川がうっすら見えた。一年生の飯田が星座に詳しく、星の名前などを教えてくれた。

19:30 就寝

● 9/15 4:00 起床 5:00 出発 6:30 燧ヶ岳 7 合目

(左) 森林限界が近づくに従い、広葉樹が無くなり、オオシラビソが主役の針葉樹林になる。(中) 2000m を超えたあたりから展望が良くなる。正面には尾瀬ヶ原と至仏山が見えた。明日の行程に思いを馳せる。

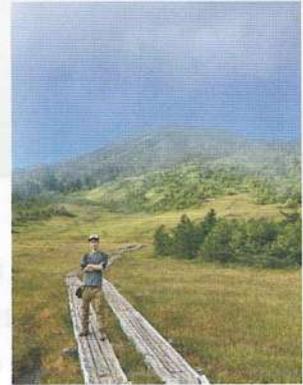
(右) 山に青春を捧げている人たちの図



7:30 柴安嶺(山頂)に到着。山頂からは 360° 見渡せた。至仏山、上州穂高岳、日光白根山、男体山、会津駒ヶ岳、平が岳、果ては富士山まで見えていた。

8:00 俎峯に到着。昨日通った尾瀬沼と道が見えた。歩いた距離の長さに感動した。燧ヶ岳山頂には 4 つほどゆるやかなピークがあり、火山であると分かる。日光白根の急峻な山頂とは対照的だった。

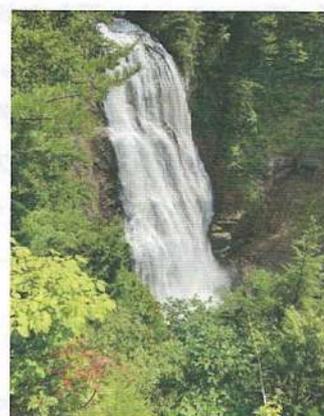
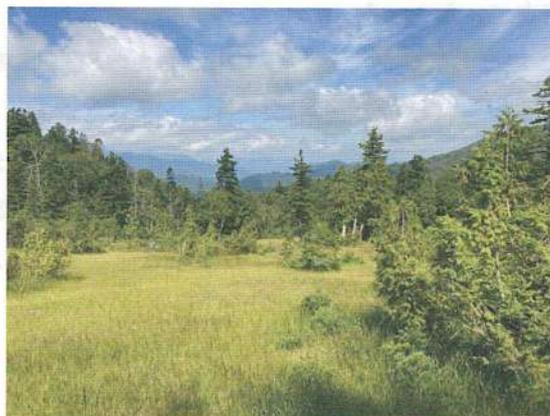
(中) 俎峯頂上。奥には日光白根山が見える。(左) 熊沢田代への道。(右) 熊沢田代から見た裏燧ヶ岳(柴安嶺)。正面とは違い、なだらかで静けさに満ちている。



9:00 時間・体力ともに十分だったため、希望者で御池に降りることにした。2年の木村と1年の飯田は明日の至仏山への体力を蓄えるため、予定通りピストンで下山。

10:00 御池ロッジ到着。アイスを食べた。御池ロッジは個人的に最も登りたい山の会津駒ヶ岳の麓にある。登りたくて仕方がなかったが、アタックザックでピストンする時間があるはずもなく、泣く泣く御池ロッジを後にした。

9:30~12:30 上田代(左)から三条の滝(右)まで歩いた。



13:30 見晴キャンプ場へ帰還。夕食の時間は昨日の反省も踏まえて5時とし、それまで自由時間にした。私はそれほど疲れておらず、天気もよかったため、尾瀬ヶ原一周ウォーキングをやらないかと希望者を募った。が、疲れたようで誰もおらず、一人で歩いた。道中、竜宮小屋分岐で、アヤマ平まで行きたくなかったが、熊警戒情報があり、一人だと危険と判断し止めた。

16:30 見晴キャンプ場へ再び帰還。 17:00 一日目と同じような形で夕食 19:00 就寝

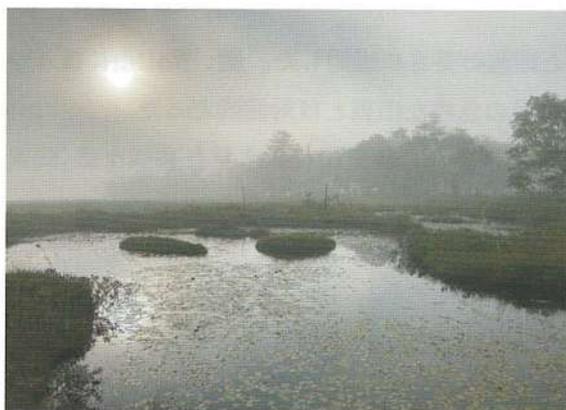
● 9/16

3:45 起床、1年の井上と谷口にテントを持たせた。 5:15 出発

この日の早朝の尾瀬は、霧が濃かった。しかし、霧のおかげで神秘的な雰囲気があって感動した。昨日と一ヶ月前にも同じ場所を通ったが、霧が出るところまで雰囲気が違うのかと驚いた。

(左)徐々に太陽が見え始め、霧が晴れていく

(右)この頃には霧が晴れ、青空が見え始める。

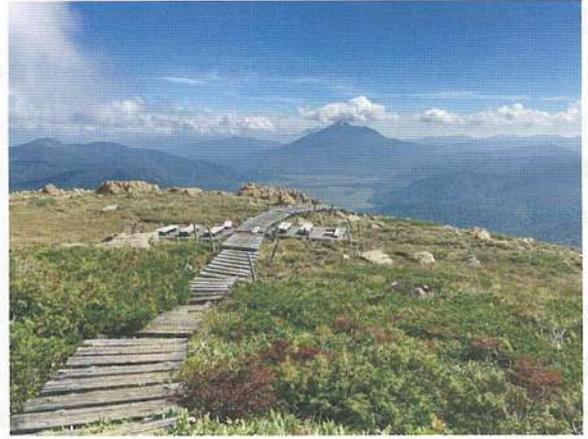
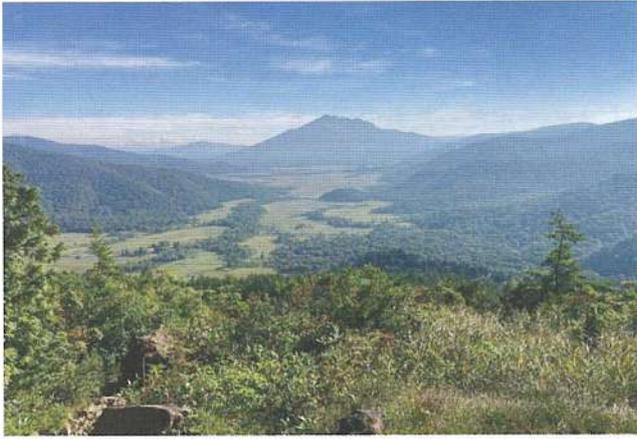


7:00 山の鼻小屋到着。

1年の飯田が疲れ気味だったため、水とバーナーを代わりに持った。

8:00 至仏山中腹。至仏山は蛇紋岩の性質上、森林限界が低めである。昨日登った燧ヶ岳との違いが面白い。3合目あたりから早くも木がまばらになり、尾瀬ヶ原を一望できるようになる。

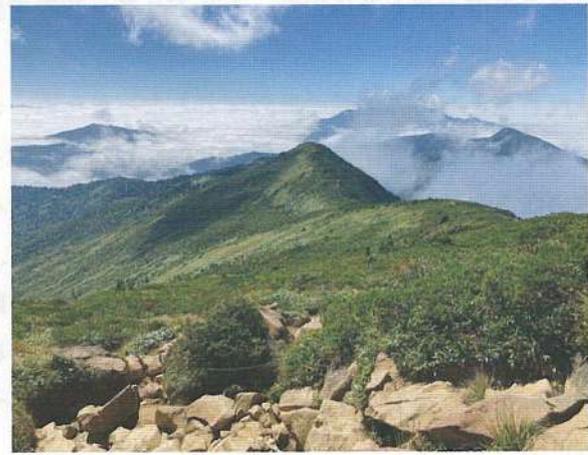
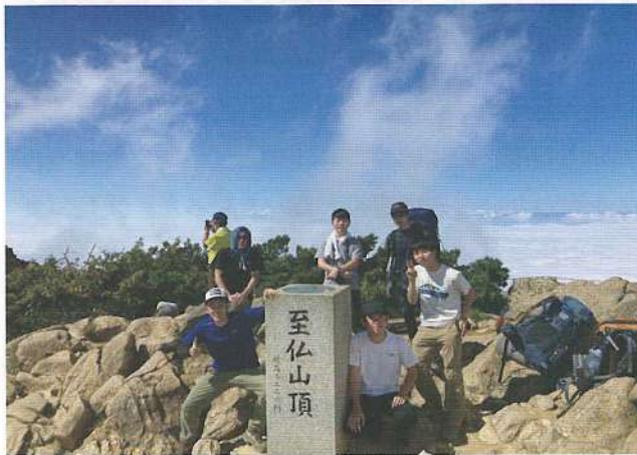
山頂まで、後ろを振り返ると常にこの景色が見える。急登だが、景色のおかげで疲れも吹き飛ばす。途中、鎖場がいくつかあり、滑りやすい蛇紋岩の性質もあって少しヒヤッとさせられたが、問題はなかった。高度を上げると周りの平ヶ岳や日光白根も見えるようになってきた。



10:00 至仏山登頂。関東側は雲海が地平線まで広がっていて美しかった。

(左) 山頂標識

(右) 小至仏山への美しい稜線



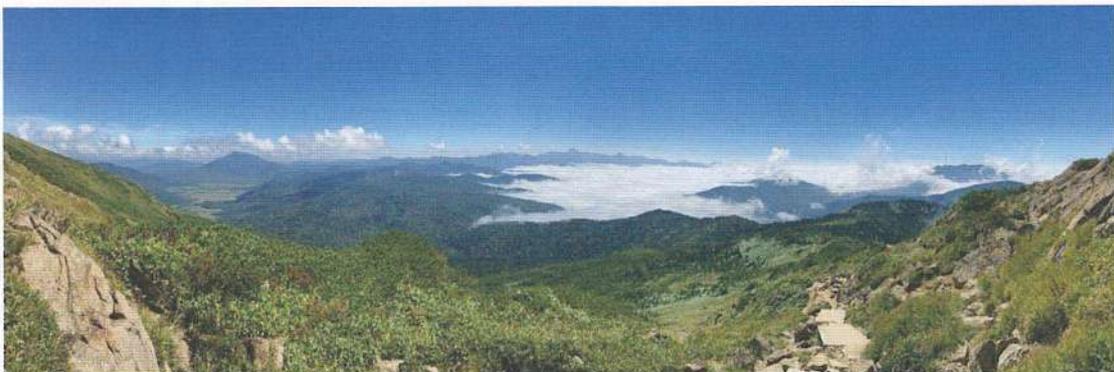
11:00 小至仏山登頂。至仏山～小至仏山間の稜線は蛇紋岩がツルツルで、慎重に進んだ。奥に笠が岳の美しい稜線が見え、非常に行きたくなかったが、集団行動のため断念。

12:30 鳩待峠に下山。一年の谷口は予約していた戸倉発の高速バスで帰った。もし遅れたらどうするつもりだったのだろうか。残りの5人で山小屋で昼食を取り、戸倉から路線バスで温泉へ。

15:00 塩の井で下車し望郷の湯へ。580円という安さにも関わらず、露天風呂までついてくる素晴らしい温泉だった。露天からは赤城山が見えた。3日間の疲れを癒し、帰路についた。

18:00 沼田駅解散

22:00 帰宅 お疲れ山！



至仏山から小至仏山までの稜線上で撮影したパノラマ写真。雲海と尾瀬ヶ原、奥に見える日光の山々が、絶妙なバランスで組み合わせられた絶景。

② 所感 (CL:羽山航平)

今回の合宿は、急な変更により、北岳の予備日を使って1日ずらした上で、希望者のみで行くという体制で実施した。そのため、参加者については元々14人の予定だったものが、6人になってしまった。素晴らしい山行だっただけに、当初予定していた全員でそれを味わうことができなかつたことは、残念でならない。

今回は天候に恵まれ、3日も快晴の中実施できた。尾瀬の自然は非常に美しい。その主たる尾瀬沼、尾瀬ヶ原、燧ヶ岳、至仏山を良い天気の中満喫することができたのは、非常に幸運だと思う。広大に広がる草原、道中の木々や池塘、山頂からの絶景、どれをとっても美しく、生涯忘れがたい素晴らしい山行となった。道中特にケガなどトラブルが起きなかつたのも良かった。

今回の合宿で良かったのは、テント泊の登山への理解が深まったことだと思う。同じテント泊でも、テントに荷物をデポして登るのと、テントを担いで登るのとでは、難易度に雲泥の差がある。同じような高さの燧ヶ岳と至仏山を、それぞれ違う装備で登ることによって、装備の有無による差を体で理解することができた。

反省点としては直前の計画変更となったため、きちんとコミュニケーションが取れていなかったことが挙げられる。一年の谷口が帰りの高速バスを取っていたのは事前に連絡されておらず、想定外だった。本来なら帰りは下山時刻が遅れることを見込み、バスを取らないように連絡するべきだった。また、食料計画について、十分に知らせていなかったため、一年の飯田が3日目の行動食がなくなるという事態が発生した。共同炊事という形をとるか、各自の自己責任を強調する必要があると感じた。

今回の合宿は結果的に最低限、体力・経験のある6人だったからよかつたものの、至仏山の時点では、一年の飯田に疲労が見られた。代わりに荷物を持つことで、このアクシデントにも対応できたし、鳩待峠にエスケープするという手段もあった。しかし、元来の北岳の場合、より長距離・長時間の、エスケープルートがない登山で、さらに初対面で体力の無いだろうメンバーも何人か来ることになっていたことから、かなりのリスクがあつたと考える。現在の山の会では、登山以外集まりなどの活動が無いため、コミュニケーション不足や、メンバー同士の体力差が目立つ。山の会新幹事長として、秋学期以降は肺活量を増やし、楽しく安全な登山ができるような体制作りを目指していきたい。

今回の合宿で考えさせられたのは、安全で楽しい集団登山をするためには、3つの力をメンバー各々が最低限身に着けている必要があるのではないかということだ。3つの力とは、体力・知力・コミュ力のことである。体力は、集団についていくために必要だ。体力がないと、集団のペースに無理に合わせ、筋肉痛になったり、疲労からの落石などリスクが生じる。加えて、体力に余裕があれば景色を見ながら楽しく登ることができる。知力は、登山に関する知識である。登る山や周りの山の地名・ルートの地理的知識と、テントの張り方、食事の作り方などの生活的知識、岩の登り方、地図の読み方などの技術的知識の主に3つの知識が必要だと思う。今回の合宿では、知識の必要性や共有を行っておらず、半ば私がガイドのような登山となつてしまつていた。それぞれが責任感を持って知識を身に着け、行動できるチームが理想的だと思う。コミュ力は連絡をする力と、会話を盛り上げる力の二つが必要だと思う。前者は、個人的な都合があれば前もって連絡することや、不安な点があればすぐ聞くこと、浮石など危険箇所を後列に伝えることなどの、いわゆる「ほうれんそう」(報告・連絡・相談)のことである。ほうれんそうの徹底はトラブル回避、リスク回避につながる。後者は、山行中の会話を盛り上げる能力である。何も会話がなかつた、味気ないし、悪い雰囲気になつたりする。

現状の山の会は、以上3つの力が個々人で不足している。そして、それが山行中のヒヤリハットや、

会のまとまりの無さに繋がっている。新幹事長として、こうした力を個々人が身に着け、安心・安全で楽しい登山ができる会にしていきたい。そうすれば、会員全員が山を全力で愛し、楽しめる、早稲田一のサークルの発展できるだろう。しかし、そのためには、会則・内規の改善、普段の活動の再会、伝統の復興など課題が山積している。

私は幹事長として、山の会の活動の活発化、健全化に全力で取り組んでいこうと考えています。山の会のOBの皆様方におかれましては、山の会の今後の活動のご指導、ご協力、よろしくお願いいたします。

(6) 現役 OB 千露里庵合宿

鹿間行喜 (S52 卒)

- ① 日程：2022年10月1日(土)～2日(日)
- ② 集合：「NPO 法人千露里庵倶楽部」10時30分
- ③ 参加者：現役：高橋花奈(3年)、藤原隆仁(2年)、羽山航平(2年)、木村亮英(2年)、小原菜穂(1年)、齋藤壮呉(院1年)
OB：行方正幸(S50卒)、村田宣男(S52卒)、三宅辰幸(S52卒)、米山不器(S54卒)、岡田瑞紀(R2卒)、鹿間行喜(S52卒)



八ヶ岳の麓、山梨県甲斐大泉にある山小屋「千露里庵」にて現役との合宿が行われた。当初7月30日～31日に予定した計画がコロナ第7波の急激拡大で一旦は繰り延べとなったが、現役6名、OB7名が参加し、稲門山の会が現役の活動を支え疎通を図る有意義な機会となったと考える。

千露里庵の全景

現役学生の遭難事故による活動休止の後、2020年新学期からはコロナ禍による2年度に及ぶ活動制限により現役学生にとっては合宿をはじめ部活動の実質が損なわれ苦渋を強いられる状況が続いていた。

そうした苦渋の時期が続いた中で今年度の山の会は新人24名、全体で50名を超える体制にあり稲門山の会としては現役の活力に一層のエールを送りたいと思う。交流やサポートをとおして安全で活発な部活動発展を願う、今回の合宿はそうした目的で行われた。



この千露里庵は20名余分の寝具を備え、自炊設備、バーベキュー、薪ストーブなどの一通りの滞在設備の他、サウナ設備(今回は使用せず、風呂小屋もあるが使用されていない様子)も付属している山小屋である。

両日は天気にも恵まれた。私にとって八ヶ岳周辺は車では馴染みがあるエリアだが小海線は高校、大学以来久しぶりであり実に懐かしさがこみ上げる。甲斐大泉の駅に降り夏の余韻が残る初秋の爽やかな暖かさを感じて小屋を目指し歩きだしたところで村田氏が手をあげていた。続いて米山氏や岡田氏らOB、現役がまとまり目的地へ向かって歩いたが目的地が見当たらない。途中やはり車で目的地を探している三宅氏と合流、今回参加者全員が千露里庵は初めてであっ

たが駅から徒歩2分という事前の誤情報によりアクセスに楽観していた。一足先に近隣住民の案内により現地到着していた行方夫妻と辛うじてスマホが繋がるものの、ナビ情報の不一致にも惑わされ木立や藪の中約1時間余の彷徨であった。

オリエンテーション

予定約1時間余のオーバーだが参加者自己紹介の後さっそく買い出し小屋準備に取り掛かった。食材調達には大泉駅の東側に車で5分程度の場所に充実したスーパーがあり周辺の別荘客なのか昼時でかなり盛況であった。午後は行方代表から実習としてナイフで食材を調理しお米から炊いた昼食のカレーライス作りとザイルワークが行われた。山での調理はOBにとって極く普通だが昨今、個人毎に用意した過熱だけの簡易食料利用や個人様式に慣れた現役にとってナイフを使って調理した料理を皆で分けて食べることも有意な体験。遅めの昼食になったが、外で仲間と作って仲間と食べるカレーライスは昔からいつも格別だ。また、普段の山行でも覚えておくべきロープやシュリングやカラビナの役に立つ使い方について現役クライマーの岡田OBらを交えて有意義な実習が行われた。



バーベキューの風景

14:00 過ぎカレーライスの昼食と並行して夕刻のバーベキュー準備にとりかかった。小屋の前の広いエリアにドラム缶しつらえの籠2個に薪を燃やし周りをベンチで囲んで現役、OBの談笑も盛り上がった。多めに用意した肉も順調に消化、三宅OBが地元塩山で生産した野菜は格別に美味しい。途中、岡田OBは翌日の社会人山行参加に向かい、行方代表は未だ事故の後遺により山小屋宿泊が厳しく予定どおり近くの宿利用に向かった。日が落ちるとやはり肌寒い、薪の火を囲みながらランプを灯し星空を仰ぎながら静かな歓談が続いた。



20:00 を回り就寝、クリーニング済のシーツ、枕カバーを配り就寝についた。なお小屋は電気が配電されているが容量が極めて限られているためトイレに照明はない。携帯電灯が各自に必要である。

翌日6:00 起床、引続き晴天である。シチューを作り野菜、パン、コーヒーを中心に屋根付きの炊事場で朝食を囲んだ。また現役の羽山くんの権現岳への山行のため天女山登山口駐車場まで送迎(6:30着)。ゆったりと朝食をしながら歓談が続いたが、近くの宿に宿泊した行方夫妻が小屋に戻り小屋の内と外の片づけ、点検を全員で取り掛かった。

荷物をまとめ小屋前に集合、各人の合宿の思いを表明し合宿を締めくくった。こうした小屋利用を含めた活動への期待も掛かる。写真撮影を行い9:30 現地解散とした。

今回の合宿はコロナの影響も受け一時は実施が危ぶまれたが有意義に実施ができた。

千露里庵運営主体の関係者へ精力的に調整して計画を策定してくれた行方代表と現地の参加まで献身的に支えて頂いた奥様の順子さんには改めて感謝申し上げたい。

*千露里庵は学院OBが作った山小屋をNPO法人として運営される会員限定施設である。学院OBであり、山の会OBである吉田稔氏(S38年卒、2万円の寄付を頂いた)らとの関係の中で、稲門山の会及び現役学生の利用に供するように働きかけがあったものである。

●千露里庵合宿を通じて

2022年10月1日(土)～2日(日)にかけて、山梨県北杜市大泉町にある千露里庵にて、OBの方々7人と現役生6人で合宿を行いました。合宿ではテント設営、ザイルワーク、調理等の実習を実施し、また装備や非常時の対応などを教えていただき、夜にはバーベキューを楽しみました。

まず、今回の合宿を実現するためにあたり、様々な方が協力してくださったことに感謝申し上げます。去年からの現役生の強い希望によって、6月頃から稲門山の会役員の方と現役の三役との間で話し合いを進めてきた千露里庵合宿ですが、本来は7月末に行う予定でした。その時期の実施は新型コロナウイルスの感染者数急増の影響によって延期を余儀なくされましたが、今回2ヶ月の延期を経て無事開催することができとてもありがたいことだと実感しています。

合宿では二日間とも天気に恵まれ、とても楽しく勉強になる経験をさせていただきました。まず、1日目に行った調理実習ですが、これは現役生のために急遽追加していただいた行程でした。というのも、今までコロナ禍の影響もあり、合宿において登山メンバー全員で調理し、同じ食事を囲むという経験があまりなかったからです。カレーライスを作る際、野菜の分量の読み違いなどの想定外の出来事もあり、調理の仕方やガスコンロの使い方などを実践することはとても充実した経験になりました。

そしてザイルワークの実習では、今まであまり触れてこなかった分野に触れて興味が出てきた現役生もいました。私自身、今まで山の会の活動を通じて様々な山の楽しみ方を学ぶことが多かったのですが、今回のザイルワークを通じて新たな楽しみ方を知ることができました。

バーベキューでは、美味しい野菜やお肉を楽しむとともに、OBの現役時代の山の会の様子や合宿について、おすすめの山や大学時代の経験について、今山の会の活動とこれからについて、幅広く話し合う貴重な機会になりました。私は特にOBのお話を聞いて、大学時代のうちにもっと色々な山にチャレンジしていきたいという意識が強くなりました。

今回の合宿を通じて、OBの皆様ととても充実した時間を過ごせたと思います。本当にありがとうございました。また新入生や、他の初心者の現役のメンバーとともに、テント設営などを学びつつ合宿を行えたらと思っています。

高橋花奈(WMS 3年)



美味しい朝食の時間



合宿終了時の集合写真



(7) 日本百名山登了記念合宿

- ① 日程：2022年10月10日～13日
- ② 参加者：大国恒雄(S33卒)、本橋隆夫(S36卒)、廣瀬舜一(S38卒)、打矢之威(S36卒)、鈴木明人(S40卒)、長谷川徹(S40卒)、笠原豊(S40卒)、行方正幸(S50卒)
- ③ 概要：

日本百名山登了者合宿及び山行に参加された皆さま、怪我や著しい疲労などを残すことなく、旧交を温めることが出来て良かったと思います。お疲れ様でした。

大国 OB



本橋 OB



廣瀬 OB



打矢 OB



鈴木 OB



長谷川 OB



笠原 OB



行方 OB



● 10/10 中の湯への集合と宿泊

長谷川氏の靴トラブル発生遅延が生じたものの、タクシーを使っただけの追いかけにより、温泉旅館での夕食の宴は8名揃って中味濃く意義深い会談が行われた。(笠原記)

初めに今回の企画の呼び掛け人の廣瀬 OB から、稲門山の会には合宿参加者7人+6人の13人の百名山登了者がいる。山の会も高齢化進んでいま集まらなければとの思いで皆さんに呼び掛けた、と挨拶があった。

次に参加者の近況報告が行われた。

大国 OB：ここは4年前に遭難した高野君との思い出の地、今は登山から山城の探訪をしている。最近行った青森県の七戸城が素晴らしかった。

本橋 OB：岩手大学へ行っている孫と山を登っている。早池峰山、烏帽子山、八幡平など登った。打矢 OB：山の会の生物部で生きた鶏を背負って北アルプスを縦走した。鶏はザラ峠で卵を産んだ(笑い)。鈴木 OB：大国さんにあっておきたくて参加、いま建設通信新聞に「東京湾トレイル」という記事を連載している(「お知らせ」で紹介)。長谷川 OB：出光に登山部を作って30年、もう270名山登っているけど、脊柱管狭窄症を発症。それでも300名山登頂が目標だ。



行方 OB：オブザーバー参加です、4年前にクライミングジムで大怪我、山登れないけど現役の指導に専念している。OBの皆さん会報の投稿よろしく。笠原 OB：学生時代より社会人になってから登山を継続し、稲門山の会の皆さんと一緒に百名山。ひよんなことから和田 OB(S33年卒故人)の遭難に対応することになった。♫は廣瀬 OB：高齢者の登山には普段の食事と健康管理が大事、百名山では7年前に静岡の田子の浦(海拔0m)から富士山3776m山頂に登ったのが特に印象に残っている。

部屋に戻って反省会

宴会の時間が終わり、その後を部屋に移して参加者の怪我・病氣自慢、早大山の会設立の頃の貴重な話、合宿の失敗談、山の会の恋愛伝説までお聞きする事が出来て爆笑もの一夜でした。(行方記)



夕餉時以降諸先輩方のお話を伺い、楽しく歓談でき有難うございました。ただあまりにも時間経過が速く、十分に話をお伺いできず残念でした。11日は皆様と別れたのち約2時間河童橋周辺を散策、爽やかな山の空気で心が洗われました。やはり山は素晴らしい！ まだまだ登りたい山も残っていますので体調の回復を図り、頑張ろうと欲張っています。笠原様、きめ細やかなスケジュール管理 本当にありがとうございました！(長谷川記)

朝食です

● 10/11 中の湯朝の解散～徳澤園

天気晴れ、中の湯温泉旅館から霞沢岳、穂高岳を望むことが出来た。自分の車で帰る大国さんと別れ、7名は上高地行の送車に乗って、上高地終点までの行方・長谷川氏と別れた5名は大正池前で下車し、大正池→田代池→ウエストーン碑→河童橋→上高地山岳研究所へ寄った。そこで鈴木氏と別れ4名は梓川右岸を進み、穂高神社→明神館→徳澤園へ行き、投宿した。

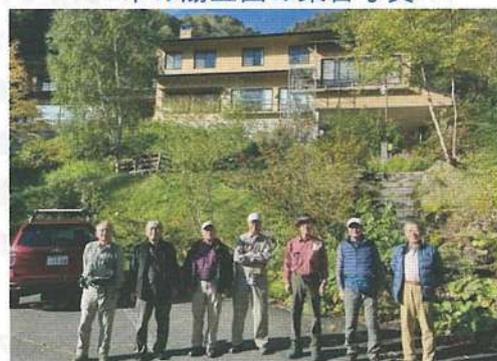


● 10/12 徳澤園～霞沢岳ジャンクションピーク(JP)往復→山研(日本山岳会山岳研究所)

天気は晴れたが、清明度は期待に不十分だった。白沢から黒沢沿いへ進み、当初は計画通りの進行に見えたが、傾斜を増すと登行速度が鈍った。単独行者の出血ハプニングに遭遇し、止血待ちで少し遅れた。

中の湯正面の集合写真

徳本峠小屋への道を省略し稜線へ直登した。そこからJPへの登りに3ピッチを要し、山頂での休憩も長くなった。徳本峠からJPへの登りで樹林の隙間から穂高岳を見透かせる所は数か所あったが、写真に撮れるほどではなかった。JP頂上では反対側の南側が見えるだけだった。



下山にかかり、稜線を徳本小屋へ行きかけたが、計画より3時間遅れを生じていたので分岐へ直降した。付記したとおりヘッドランプ不携帯となっていたので途中で日暮れることを重大視し、笠原は焦りの気持ちから先行することにし、付記のハプニングを起こしてしまった。

徳本峠登山口で待っていると、見落とししたデポ荷を廣瀬が見つけて運んで来てくれた。日が暮れたが廣瀬のヘッドランプが紛れてしまい、笠原のヘッドランプ一つで並んで歩き明神館へ寄った、笠原が一時行方不明を生じてご心配を掛けたことなどへお詫びと御礼を申し上げた。

小梨平から河童橋まで複数のルートに若干迷い、JAC 山研へ 19 時到着し、打矢さんと山田管理人に迎えられた。山研の設備や寝具は快適だった。

(付記)

黒沢沿いの登りで笠原が荷物デポしたがヘッドランプを残して携行しなかった。すぐ気付いたが取りに戻ることを省いたのが以下のハプニングの元だった。下山に移って、行動時間の遅れを重視し、日暮れまでに安全圏へと焦った。デポを早く探したいと先行して見落とし、もっと下かと探しつつ、デポ地を過ぎた自覚が遅れた。「見落とし荷物は翌日探しに戻るから」と途中の橋上に書置きを残し、電波状態の改善を期待して徳本峠登山口まで先行し、スマホ連絡しつつ廣瀬さんを待った。

追いついた廣瀬さんは、デポ荷物を見つけてくださり、背負って来てくださった。大変なご負担と心配をお掛けしてしまい、有難く感謝するとともに、同行者から離れた大きな誤について、面目なく大いに反省する次第です。

霞沢岳ジャンクションピーク



上高地の山研(お世話になりました)



● 10/13 山研→岳沢往復→山研→上高地帰途

山研での自炊は打矢さんに依存し、温かい睡眠を享受できた。

9:50 頃山研を出発し、岳沢を登った。10 番ポイントから始まり、第 6 番で上部から岩塊が堆積し眺望できる地(展望台? = 標高 1700m)まで登った。氷河谷末端のモレーンの岩塊堆積とも見える岩塊帯の上から西穂～奥穂～前穂高、霞沢岳稜線、乗鞍岳及び上高地俯瞰などを眺めることができた。雪は見えず秋の景色だった。紅葉は鮮明とは言えず、夏の高温に焼けて枯れたような色だった。廣瀬さんは昨日の疲労は残っていないとされ、順調に往復することが出来た。

二人は上高地→新島々→松本へ進み、名古屋へ向う廣瀬さんと別れ、笠原は、急行バスでバスタ新宿へ向い、20 分延着し、品川乗換で帰宅した。(笠原記)

最後にこの企画を中心になって進めていただいた笠原先輩ありがとうございます。廣瀬先輩の健康管理法で健康寿命を伸ばして、二百名山、三百名山を目指したいものです。(行方記)

【COLUMN 2】

人間関係を築くための基本原則の学びその1
～考え方と実践のコツ - 幸運を招く素敵な人生を築こう～

廣瀬舜一 (S38 年卒)



1: 人間の本質の把握が人間力強化の出発点となる

=人間関係に悩まないためにマネジメント・リーダーシップの豊かな風土作りです

1 - 1 人間を理解困難なものにしているのは、心の多重構造が根本的原因である

- ①人間は各々の働きはもとより受け止め方・感じ方の違う心の多重構造を持つ存在です
同じ人でも仕事の局面で外に現れる側面が異なる複雑怪奇な存在です
- ②人間関係は人間の複雑な本質をどの領域で把握しているかが出発点となります
↳ ①自分本位で相手の言い分ややっている事を否定から始めてしまうことが
↳ ②人間関係を悪くしている最大の原因であることにいつ気付けるか!!
- ③ 否定の真逆の命の存在として肯定的に捉えることで複雑な人間関係が解き易くなる
↳ ①人を立てれば倉が建つ = good will の調和の世界
↳ ②相手を肯定的に捉えることこそ相互理解とその後の発展的關係が生まれる
↳ ③人心掌握の為の魔法の杖と言ってもさしつかえありません

1 - 2 心の多重構造として理解する

	考え方と心の働き	本質を表す言葉
* 芸術・芸能 文学・小説 一般の世間話し = 感性、感情	感情や感性の領域 痛い-快い 好き-嫌い 義理・人情 心地良さ 心の葛藤	「人間は感情の動物である」
* 孟子・孔子、四書五経 日本の古典 倫理・道徳 論 = 理性・知	社会規範、理想 良識・道徳・倫理 仕事を通じて社会貢献を 利他心で 他人に尽くす 人の道を説く	「人間は考える葦である」
[すさまじい生き様 執着心、強欲さ] = 本能心	生きる力の源 怒り、煩惱、闘争心 生きるための生物的欲求 利己心=損得 自分さえよければ	性悪説の根拠 ほっとけば ↳悪さをする存在 規則や法律で縛る
* 宗教、霊界の世界 潜在意識の世界 無意識の世界 魂・命 真底	命の尊厳 真・善・美 愛・知恵・ 調和の世界 永遠に続く 命としての存在 DNAの連鎖	性善説の根拠 神の子であり 良心や仏性をもつ 尊い存在です

1-3 仕事や生活の中で人間関係が必要になる分野 =人間は一人では生きていけない

①リーダーシップやマネジメントの基礎工事部分です

この人間の本質の理解と把握無くして

部下の心を掴み人を動かすことは出来ない

- ㊥社内
 - ㉠ フォーマルな関係 - 仕事上の上司・部下との上下関係、同僚、お取引先
 - ㉡ インフォーマル // - 個人的関係、好き嫌い、馬が合う、趣味、先輩後輩
出身大学
- ㊦社外
 - ㉠ お取引先、公的機関 - 社会的な各種団体
 - ㉡ 男女の異性間、家庭内 - 夫婦、親子、兄弟、親戚
 - ㉢ アフター5の世界 - 趣味や同好の友人・知人、隣近所

2: 理解しにくい人間本質を命の存在として最大公約数的に掴んで見て下さい

驚くほど人間関係がうまく行きます

2 - 1 何故なら人間は誰でも **40億年続いてきた尊い命 (=DNAの連鎖)** だからです

- ㉠ 私たちは**永遠の命の流れ**の中に生きている、否定しようのない存在なのです
- ㉡ 否定しようにも否定しきれない、**尊い命としての存在**がある
- ㉢ **なのに実生活では相手の否定から始まる**ケースが多発している



言い換えればこの**絶対的な矛盾**をどう**紐解いていくか**が**人間関係の基本**です

2 - 2 「**否定されたくない**」という**命の本質**から誰もが逃れられない宿命を持っている

㉠ 従って自分を否定されるあらゆる言葉に**拒絶反応**を示す

=これは誰もがもつ**精神的本能**です

↳ 無視・嫌い・いや・ダメ・つまらない・能ナシ・役立たず etc

㉡ この**精神的本能**を**無視**して相手に**否定用語を使い過ぎる**のが並みの人間
結果として必ずあなたの敵に回り

↳ 人間関係を破壊して互いに苦しんでいる

㉢ **good will の人間関係が出来ない**、大きな原因は自分で作っているこの悪い習性に
人生のどの時点に気付くかで楽しい人生になるか、そうでないかが決まる



2 - 3 相手を否定して自分が勝ったつもりになっている一方では

㉠ **逆に5つのたいを持つ**のも - **人間の本性**でもある

㉠ つまり単に相手に絶対肯定の人間観で相手に肯定的に対応する習慣を付ける

㉠ **認められたい**

㉡ **誉められたい**

㉢ **お役に立ちたい**

㉣ **大切にされたい**

㉤ **愛されたい**

に答えてあげると**みんな大喜び**する

これが **good will の人間関係の極意**です

㉡ どの気持ちが強く出ているかを個人別**的確**に読み取り

㉠~㉤の潜在的願望に**マネジメント**の中で部下や仲間内にどう対応していくか

㉠ **まず、最大公約数の「ハイ・ありがとうございます」の**実践**から始める**

㉡ **現実では自分本位 (自分が優秀との思い込み) の本能心が強いので**
普通の人間なのでよほどしっかりと自分をコントロールしないと
相手を否定し自分が少しでも優位に立ちたいという

↳ 本性が表面に出て相手を**全面否定**してしまうもの

相手を傷つけたことに**気付かず**

↳ **人間関係を悪化させ悩み苦しんでいるのが現実の姿**です

【COLUMN 2】

日本岳人列伝その5：小暮理太郎

金子治雄（S41年卒）

著作、福村書店「山の憶い出 上巻・下巻」 1938 初版、1956 再刊、1961、5刷

我が国における近代登山の歴史に多大な足跡を残した小暮理太郎の著作は、「山の憶い出、上下巻」だけで、しかも平凡社での再刊版も絶版になり、今や完全に忘れ去られた岳人になりました。

小暮は田部重治と多くの山行を共にしていたため、田部の「日本アルプスと秩父巡礼」で昔から親しんでいた岳人でしたが、彼の唯一の著作「山の憶い出、上下巻」は3,000円と高価なため、若い時は読む機会はなく、古書で手に入れたのは60歳になった頃でした。神田の悠久堂の山岳書専門の書棚で、存在感を示していたこの重厚な書籍を実際に手に入れてみると、改めて一つの時代が完全に終焉したなという感を抱きました。



本書は戦後昭和31年に再刊され昭和36年には5刷に及びました。昭和30年代前半フランク永井の13,800円という当時の大卒初任給の歌が大ヒットしましたが、この著作3,000円は計算すると当時の大卒初任給の22%に当たりました。発行数は不明ですが、当時これだけ高価な書籍が5刷に及ぶほど購入されました。この22%の数値を現在の大卒初任給平均23万円に当てはめると何と50,600円に当たり、タブレットの上級機種よりかなり高価です。

昔の登山愛好者たちは考えられないくらいのコストと手間暇かけて山の情報を集めていました。現在は手間暇がかかるのは、味わい部分の内容で、そういう部分を欲しなければ、デジタルの情報集めは極めて手軽です。

かつては手間暇とコストをかけて集めた書籍を、面積や規模は別として自分の城である書斎の棚に並べ紐解き、手間暇かけた成果を味わう登山者は多かったと想います。登山は下界で書物を楽しむ行為と、山行を実践する行為との両輪の世界でしたが、残念ながら書物はNHKの映像とYouTubeに代わってしまいました。

小暮は生涯に亘って奥秩父、利根水源の山々、北ア全域の稜線と谷、南アなど、未だ探検の要素の強い中部山域のほとんどの山々に足を踏み入れました。紀行では現在の登山道と別なコースを登ることもあり、山域によっては国土地理院地図を照合しながら読まないで判読できません。

小暮は本書の序で、十数年来多くの知人や書店から出版を勧められたが、自分はそれにふさわしくないと、その都度断って来たと言っています。彼が出版を決断したのは、彼の晩年の年下の友人の尾崎喜八がエミール・ジャベルの訳書を初出版した際、出版社と話し合っただけで段取りを全て整え小暮に勧めたからでした。

小暮の山岳紀行の特徴は、当時未知だった登山対象の山域の概念を克明に調べて記していることです。当時多くの山域は未だ探検的な要素が強く、マクロ的な観点に立ち、古い文献を提示しながら、古より人がその山にどのように足を踏み入れて来たか克明に語っています。若い時の小暮がそうであったように、ややもすると初期の登山者たちは、行動が先に立ち、やみくもにその山域に足を踏み入れようとしますが、小暮は実際の跋涉の経験を取り入れながら、その山域の個々の山の登路を、歴史を踏まえて記述しています。この小暮の態度は、対象の山域そのものが歴史的。地形的にどういう位置づけにあるのか俯瞰し把握し、その地に足を踏み入れる近代科学思考に立脚して山岳を捉えた最初の人であったように思います。この小暮の思考は、日本山岳会を通じてその後の大学山岳部の積雪期登山方法に大いに引き継がれました。

小暮は自己について全く語りません。この著作を読んでも、小暮がどういう人でどういう人生を送ったのか分かりませんでした。小暮が小島鳥水、高頭仁兵衛に続いて日本山岳会の3代目会長を務めたことも本書には記していません。今まで榎有恒だけが語っていた秩父宮殿下の燕岳槍ヶ岳山行に小暮も同行していたことも、本書で初めて知りました。自己について全く語らなかった小暮に対し、周りの人たちが少しずつですが語っています。

田部重治は「わが山旅50年」で語ったことによると、小暮と知り合ったのは田部が東京帝大文学部英文科在学中で、小暮がハガキ文学という雑誌の巻頭で欧州の名画解説を行っていて、その熱心な読者として友人になりました。小暮は田部より10歳年長でしたが、当時東京帝大哲学科に10年近く籍を置き、僅か卒業さえ提出すれば卒業できるのに、その理由について決して語らなかったし、必要以外の事は決して口外しない性格の人間でした。更に、驚いた事に小暮が登山家であることを知ったのは、付き合い始めて1年以上経ってからだとも記しています。彼はまた仙台の二高野球部で一高を彼の強打で破ったほどの頑健な体力の持ち主だったことも知り、若い頃病弱だった田部は彼との山行をとっても力強く想っていました。

幾多の名著を出版した松本出身で梓書房を主宰した岡茂雄は「炉辺山話」で小暮の二高時代、志賀重昂の「日本風景論」の初版が仙台で発売されず、上京して買い求め、その足で着物の尻を端折り、脚絆草履に振り分けで蝙蝠傘を背にして槍ヶ岳を目指し島々に辿り着いたものの、土地の人の話で断念し、深夜松本の街を漂い、親切な素人宿屋に泊めてもらうことができたこと、直情径行だった若き日の小暮のことを記しています。

小暮は結局、東京帝大哲学科を中退し、東京市の嘱託として東京市史の編集に従事し、山一筋の生涯を送り昭和19年に亡くなりました。尾崎喜八が小暮の晩年に、小暮先生という詩でその生き様を称えています。

ちなみに小暮と東京帝大哲学科の同世代で、旧制浦和中学の2代校長の藤井宣正は、真宗本願寺派の大谷光瑞麾下の俊英でシルクロード大谷探検隊の行動支援のため3年で退官しロンドンに赴任しましたが、その前に26歳の時に校長になりました。校是の「昌文尚武」を制定した藤井校長について調べていた恩師曰く、当時東京帝大の哲学科は数人しか在籍せず、今の東大と比較にならないくらいの超エリート集団との事でした。

本書には東上州太田近郊の豊かな農村文化の中で育った子供時代の秩父連山の四季の美しさの印象が書かれていますが、恐らく小暮の美意識と価値観の原点が、この美しい農村で育まれたのでしょう。田部も富山平野で同じように育っています。

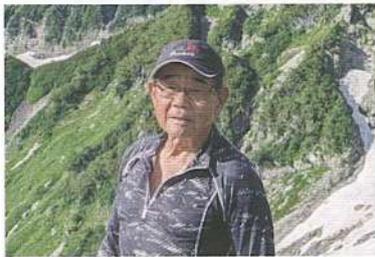
小暮も田部も山岳という自然の舞台と思想の舞台、或いは美の舞台において、近代人としての西欧自然思想と、花鳥風月を愛する日本人としての自然思想との融合を、一生涯かけて模索した巡礼人であったような気がします。自然の思想はまた美の価値観をどうとらえるかの問題であり、その思索の中で森林や谷に我が国特有の自然の美しさを再発見し、人々にそれを紹介することが使命であると認識し山に生涯をかけたのでしょう。小暮と田部はキリスト教的に言えば我が国の近代山岳活動における使徒と言えるのでしょうか。



【お知らせ】

(1) 吉田 稔 OB (S38 年卒) が創造展オキラジ賞を受賞！

2022年5月20日(金)~27日(金)まで、上野の東京都美術館において、第75回「創造展」開催されました。「創造展」は、創造美術会が主催する洋画、日本画、染織画、彫刻、陶芸、小品部門などの多岐にわたる総合芸術の全国公募展で、全国の266点の出品作品の中から吉田稔OB (S38卒)の作品(右)「花霞」がオキラジ賞を受賞し、5月23日に東京都美術館において表彰式が行われました。



(2) 鈴木明人 OB (S40 年卒) が建設通信新聞に「東京湾トレイル」掲載

鈴木OBが提唱するインフラツーリズム。「東京湾トレイル」という記事が建設通信新聞に掲載されています。海を見ながらの散歩も良いですね。



土木技術者が歩く/走る インフラツーリズム

成田空港、羽田空港、横須賀といった日本の玄関口に面する東京湾岸には、多くの海浜公園や自然保護地区、遊歩道などがある。けれど、これらの施設は点として存在しており、線にはなっていないのが現状である。

土木系大学教授や土木系住居で構成される「NPO法人シタタタ日本東京湾トレイル推進メンバー」は、東京湾岸に点在するこれらの優れた施設を線で結び、散歩・ジョギング・自転車通行可能な東京湾トレイルを創ることを目指して活動している。

今回、上記メンバーが歩き、走りながら見て感じた東京湾岸インフラツーリズムの魅力を月1回のペースで紹介する。どうぞ期待！

造園土木の粋を訪ねて

土木学会誌2022年8月号に掲載された「造園を学ぶ旅」の中で、日本造園は立派な土木遺産であり、形式は、日本3派の一つ「流石の造園（広島派）」は、庭園設計の好例であると述べられている。東京湾をめぐる施設の中にも名勝として知られる二つの日本庭園があり、22年9月、残暑の中、この2庭園と近くの埠頭施設を訪ねた。

JR山手線「浜松町駅」から徒歩15分くらいで、日

の大名たちが憩いの場として楽しんだ様子を目に浮かぶようであるが、現在は「国指定名勝」として、一般民衆の憩いの場となっている。

■浜松宮
芝罌宮を出て、池甲に向かって、海軍大通りを北に10分ほど歩くと「浜松宮造園庭園」（以下「浜松宮」）中の御門出入り口に着く。浜松宮は、総面積25万9,215.7平方メートル、現在は海軍艦に属して、東京湾の干満で海水が御門内の潮入の池に出入りする。そして池の水位を調節するために機械式の水門が取り付けられている。

この庭園は、1654（承応3）年、徳川4代将軍家綱の命で甲府宰相の松平頼重が海軍を築き立てて甲府高屋敷という別邸を立てたのが始まりである。その後頼重の子弟川島重友が6代将軍になったのがきっかけで、この敷地は将軍家の別邸となり「新御殿」と呼ばれるようになった。

その後徳川将軍のもとで何度か作庭と改修が行われ、11代将軍家吉の時代にほぼ現在の姿になったと伝わっている。

明治維新の後は皇室の離宮となり、名称も「浜松宮」と変わった。将軍の別邸であったこともあり、東京湾側には将軍が船に乗り降りするための船着き場が設けられ、今もその跡が残っている。

広い園内を歩くと、花を愛でるための梅林や花畑と考えられる。三つ目は、花を愛でるための梅林や花畑と考えられる。徳川時代の将軍たちは、この庭園に客を招き、お茶会や食事などを提供して楽しんでいたが、近年、焼失したいくつかのお茶室が復元建設され、内部も公開されている。

日本庭園を楽しむには歩き回るだけでなく、時には座ってゆっくりと苔の様子をじっくりと見てほしい。園内にはベンチやトイレも適切に配置されており、東京湾の潮の音を聞きながら、往時を偲ぶのも一興と思ふ。

浜松宮は、現在「特別名勝」「特別史跡」に指定されており、そこを目標として行く価値のある場所だ。（東京湾トレイル研究会 鈴木明人）

2022年10月13日 010面 01版 No. 03

(3) 早稲田大学山の会（現役学生）の三役の交代について

2022年11月に早稲田大学山の会の三役が次のとおり交代いたしました。

- 【旧三役】 幹事長：櫛舎祐太（3年） 副幹事長：高橋花奈（3年） 会計：小野 文（3年）
- 【新三役】 幹事長：羽山航平（2年） 副幹事長：藤原隆仁（2年） 会計：木村亮英（2年）

(4) 訃報

- ① 杉村慎一 OB(S41 年卒)「闘病中のところ令和4年4月26日に永眠しました。5月4日に家族葬を行います」と連絡がありました。故人のご冥福を謹んでお祈りいたします。
- ② 上原敏行 OB(S43 年卒)様が令和4年9月3日にお亡くなりになり、6日に葬儀を済ませましたと、ご家族より連絡がありました。故人のご冥福を謹んでお祈りいたします。
- ③ 藤澤睦夫 OB(S36. 理卒)が10月12日に86歳にて永眠し、葬儀は親族のみにて10月22日相済ませましたと連絡がありました。故人のご冥福を謹んでお祈りいたします。

(5) 2023年総会・新年会の開催について

稲門山の会の総会・新年会については次のとおり、三年ぶりに開催いたします。

- ① 日時：2023年2月5日(日) 13:30~17:00
 - ② 会場：航空会館501・502会議室 東京都港区新橋1-181-1 ☎ 03-6811-7017
- つきましては、2023年1月15日までに同封ハガキに出欠を明記して、提出して下さるようお願いいたします。また、コロナの第8波が急拡大したときは、その後対応について、出席のハガキをいただいた会員に再度ご連絡いたします。

【編集後記】

稲山会通信第46号の巻頭言は、後藤洋一郎 OB(S49 卒)の「山の会と山々が無かりせば…老いて今尚」。2011年に敗血症で臨死体験をした翌年から山登りを再開。現役学生の指導に尽力していただきました。

特集Ⅰは、「世界の山々」です。海外遠征はヒマラヤばかりじゃありません。世界中に魅力的な山々があります。昭和・平成の時代に会員たちは自分の山を求めて世界中のフィールドに冒険の旅に出かけました。次に特集Ⅱは、「2022年夏の記録」です。コロナに負けないで南アルプス、北アルプス、巻機山米子沢、尾瀬と現役・OBが日本各地で精力的な登山挑戦し、遭難・コロナ禍から脱却しました。特筆すべきイベントは「OB現役千露里庵合宿」と「百名山登了者合宿」が開催されたことではないでしょうか。

廣瀬舜一 OB(S38 年卒)が大分商工会議所の研修会で講演した、社会人初心者や就職を目指す学生の人間関係の築き方について連載開始。金子治雄 OB(S41 年卒)の連載「岳人列伝⑤」は小暮理太郎と絶好調。ヒマラヤやアルプスの北壁に挑戦する戦後アルピニズムの夜明け前、我が国の岳人の間に流れていた伝統というものを私たちに教えてくれます。

吉田稔 OB(S38 年卒)が東京都美術館で開催された「創造展」でオキラジ賞を受賞。鈴木明人 OB(S40 年卒)は建設通信新聞に「東京湾トレイル」というエッセイを連載。「大分の超経済人(大分合同新聞社刊)」で廣瀬舜一 OB(S38 年卒)が取り上げられた(次回お知らせ予定)。これからも登山以外の会員の活躍も紹介していきたいと思えます。

さて、最後におまじどう様。2023年2月5日(日)悲願の稲門山の会総会・新年会を三年振りにやります。新年会をやらずして墓場に入れれないというOBもたくさんいると思えます！ 2/5だよ、全員集合です！！

次回の特集は「山の失敗談」です。自薦他薦の投稿お待ちしております。行方正幸(S50 年卒)記